0003591000

0003591-000

５９２－８３

日本帝国の一転機

蘇峰徳富猪一郎・著

民友社

昭和４

ABA

491

日本帝國の一轉機

蘇峰 德富猪一郎著

東京 民友社發行

日本帝國の一轉機

昭和四十一年
内交・
帝圖

592-83

日本國民は、黄金に中毒してゐる、又た政黨に中毒してゐる。黄金中毒とは、利用厚生の爲めに、心身を投没して、而して其の結果として、金錢を取得することではない。唯だ何とはなしに、金錢を崇拜し、金錢の爲めには、何事をも、何物をも構はないと迄に墮落しつゝある。卽ち現時の日本にては、金錢にて購買せられざるものは、殆んど皆無に幾い。

* * *

吾人は金錢其物を敵とするものではない。富其物に反對するものではない。富の德、富の効、富の力は、十分と云はんよりも、十二分

に之を容認し、之を快受し、之を欣納してゐる。孔子の所謂る『富若し求む可んば、執鞭の士と雖も、我能く之を爲さむ』とは、吾人も同感だ。但だ當今の情態に大憾あるは、富の妄求と、富の濫用とである。黄金中毒の四字は、則ち此の意味を概括したるもの。

* * *

吾人は決して政黨の敵ではない。若し夫れ主義によりて立ち、主張によりて動き、其の意見、其の志趣を同うする人々相ひ團結し、國家の爲めに、其の團體の力を致さんとする公黨ならしめば、吾人は自から政黨員たらざるまでも、寧ろ其の隨喜者とならむ。

* * *

然も現時の政黨は、其の政黨の分類によりて、若干の等差はあるも、概觀すれば、何れも政權獲得組合にして、而も政權獲得は、利權獲得の手段に外ならず。云はゞ現時の政黨は、政黨の看板の下に、國家を喰物とする團體に過ぎざるが如き情態を暴露しつゝあるは、吾人の轉た痛恨に勝へざるところ。

* * *

固より政黨も、其の當初に溯れば、主義主張を實行せんが爲めに、政權獲得の必要を生じ。政權獲得の手段として、利權と接觸し、利權に捲き込まれ。やがては利權獲得の必要を生じたるものであらう。政黨員の心事固より諒とす可きものあり、又た憐れむ可きものあり。

されど鹿を追ふの獵師は山を見ず。今日に到りては、利權獲得が目的にして、政權獲得が手段となりて、主義主張は手段となる。此の如くして政黨は、實に政權と利權との手形交換所たるの現狀を呈し來りつゝある。

* * *

今日の日本は、無遠慮に云へば、いかさま金持と、いかさま政治家によりて、勝手次第に掻き廻はされつゝある。而して大多數の忠良なる國民は、唯だ彼等の爲す儘に一任して、指を啣へて茫然見物しつゝある。而して日毎に其の毒は忠良なる國民を侵蝕しつゝある。吾人は之を傍觀して、如何にも齒痒く思ふ、如何にも殘念に思ふ。

是を以て敢て世間滔々者流の瞋を招くを顧みず、聊か其の憂慮の一端を開陳するととした。

* * *

如何に日本が世界の上に卓立し、世界の外に孤立せんとするも、現代では絶對的不可能の事だ。而して世界は、武力的帝國主義、經濟的帝國主義、思想的若しくは文化的帝國主義もて、四方八面から日本を包圍しつゝある。然るに日本にては、此のいかさま政治家と、いかさま金持と苟合し、而して他のいかさま政治家と、いかさま金持との間に鎬を削りつゝある。此れでは今日の國策さへも定まる可きものではない、況んや百年の大計をやだ。吾人は今日のまゝにて立ち

行かば、日本は政黨亡國、金權亡國となるの外はあるまいと思ふ。

* * *

若し世界に日本同樣—其の程度は差違あるも—の病症に罹りたるものを求めば、決して皆無ではあるまい。吾人は之を以て日本の風土病とは思はない、恐らくは世界を通ずる、世界に於ける現代の一般的流行病であらう。されど他人中毒したるが故に、我亦た中毒せねばならぬ理由もなければ、中毒しても差支なしてふ道理もあるまい。他人は他人、我は我。吾人は他人の病を見て、自個の病を慰むるの愚を做す可きものではあるまい。況んや他に比して、日本の病症は、殆んど九死一生の重症たるに於てをや。

* * *

大戰後世界の趨勢に就ては、吾人は恒に深甚なる注意を拂ひつゝある。一口に云へば、十餘年後の今日も、未だ其の推移は底止する所を知らない。云はゞ今尙ほ驚波駭浪の中に、世界列國は蕩搖せられつゝある。されば今日に於て、明日の世界を豫言するは、餘りに大膽過ぎるものと云はねばならぬ。吾人は晴天とも、雨とも見定め難くある。されど若し見定め難しとせば、雨の用意をするに若くはなし。用心に國亡びずと云ふ古諺がある。此れは千古の眞理である。

* * *

我が大日本帝國は、其の國體に於て、何れの國にも比類がない。世

界の眼から尊敬せらるゝにせよ、輕蔑せらるゝにせよ、特種的國家である。吾人は單だに世界から來り侵さんとする勢力に對して、準備をするばかりで無く、我より進んで世界を善化し、美化し、道義化する任務を果さねばならぬ。此れが世界の中に、特殊國家として三千年來存立したる大日本帝國の使命である。斯る使命を自覺し來れば、我身を粉にしても、國家に奉仕したいものと思ふ。此れが忠良なる臣民の心掛であらねばならぬ。

* * *

仁者は敵無しと云ふ。日本は友を世界に求むる必要がある。然も其友を求むる第一歩は、日本をして先づ正義の國家たらしむるより先

なるは無し。若し世界が日本の正義を信用し、日本の正義に憧憬し、日本の正義を敬慕せば、世界を擧げて、日本の友となるも、必らずしも不可期の事ではあるまい。吾人は世界を正さねばならぬ。されど其の手始めには、先づ自から正さねばならぬ。我が目に梁木の横はるを忘れて、他の睫間の塵片を拂ふ可きではあるまい。我が門前の雪を掃かずして、他人屋上の霜を掃ふ可きではあるまい。

* * *

吾人は我が政黨者流にも、眞個の日本男兒の存在するを知りてゐる。彼等の中には本文記者の友人も少くない。彼等の中には或は本書中の文字の過甚なるを瞋り、咎め、若しくは憾みと

する者もあらむ。されど吾人は決して個人攻撃を事とする者ではない。唯だ團體、若しくは其の階級に就て云ふばかりである。若し諸君の中、本文記者と同感の士あらば、諸君は内部よりして、其の改善を圖る可きものであらう。假令全く同感ならざるも、採る可きあらば、之を採れ。若し或は採る所なしとするも、本文記者の忠憤の熱情に免じて、希くは再考する所あれ。

* * *

本文記者は、昭和三年の歳晩より、昭和四年の歳首にかけて、本文を起稿せんとを企てた。然も當時記者の身邊多事の爲めに、姑らく之を中止した。爾來半歳餘、耿々の念、自から禁ずる能はず。乃ち

筆硯を携へて、八月五日那須山中に入り、兀々として稿をつゞけ、十六日に至りて、之を了した。山中殆んど參考書なく、其の大半は、記憶を喚び起して、之を筆錄した。されど其爲めに語りて詳かならざるの責を遁れんとするものではない。但だ本文の歸結、天皇親政の一件に就ては、尚ほ說く可きものを剩してゐる。然も此は重大なる問題にして、輕々しく著筆す可きものではない。但だ有心の讀者諸君は、必らず紙外に於て、本文記者の微意の存する所を看取せらるゝであらう。

昭和四年八月十七日午前六時前十分、方さに
歸京の途に就んとする朝、那須客舍に於て。

蘇峰學人

日本帝國の一轉機 目次

第一　善化乎惡化乎……一
第二　鼠と猫蛙と蛇……七
第三　前門の狼……一二
第四　後門の虎……一八
第五　猫乎虎乎……二四
第六　虎の餌食……二九
第七　世界大戰の代價幾許ぞ……三五
第八　赤化乎金權化乎……四〇
第九　世界二分の豫想……四五

第十　誰か英國を智者と云ふ乎……五一
第十一　英國の國是……五七
第十二　英米の決闘……六二
第十三　英米對日本の三世相……六七
第十四　日米の離間者……七二
第十五　戰爭の歷史的經過……七七
第十六　古の戰爭と今の戰爭……八二
第十七　帝國主義の三階段……八七
第十八　米國と滿洲問題……九三
第十九　油斷大敵……九九
第二十　帝國主義の本家本元……一〇四

第二十一　無保障の平和……一一〇
第二十二　不戰條約に關する樂觀的考察……一一五
第二十三　不戰條約に關する悲觀的考察……一二〇
第二十四　ウェルス氏の戰爭防止策……一二五
第二十五　元龜天正も亦た金の世の中……一三一
第二十六　黃金萬能力の支那……一三七
第二十七　政治と金錢……一四二
第二十八　米國と英國との位地顚倒……一四七
第二十九　弗の米國……一五三
第三十　米國の政治的腐敗……一五九
第三十一　國是と理想……一六六

第三十二　金錢取引の現代日本……一七二
第三十三　政は金なり……一七八
第三十四　理想を高標せよ……一八四
第三十五　日本帝國の特性……一八九
第三十六　喰物にせられつゝある國家……一九四
第三十七　日本の對世界的使命……一九九
第三十八　帝國國是の復活……二〇五
第三十九　人物政治……二一〇
第四十　正しき意味に於ての立憲政治……二一五

日本帝國の一轉機

徳富猪一郎

帝國圖書館藏書

世界進行の方向

第一　善化乎惡化乎

世界は如何なる方向へ動きつゝある乎。善化乎、惡化乎。進歩乎、退歩乎。平和乎、戰鬪化乎。吾人の希望は善化であり、進歩であり、平和である。但だ希望通りに、其の進行が目醒しからざるを悲しまざるを得ない。

* * *

不安增加

世界大戰後、既に足掛け十二年を經過した。然も世界は未だ決して安定しきれない。苟も四圍の事相を注視するものは、誰しも決して高枕安臥するものはない。言ひ換ふれば、世界の內情を研究すればする程、吾人には不安が迫り來りつゝある。而して其の不安が增加し來りつゝある。

* * *

戰爭に對する戰爭

世界戰爭は、戰爭に對する戰爭であると宣傳せられた。卽ち戰爭を世界から未來永劫片づくる爲めの戰爭であると宣傳せられた。而して中には眞に斯く思ひ込んだものもあつたであらう。惟ふに其中に於て、重なる一人は、恐らくは米國故大統領ウイルソンであつたらう。彼はその爲めに、國際平和聯盟條約を、ヴェルサユ條約中の重なる要項として、其中に含ましむ可く主唱した。

* * *

其の結果は奈何

英佛兩國に於ては一少くとも其の代表者たるロイド・ジョージ、クレマンソーの二人は一中心左程熱望せざるも、ウイルソンに引づられ、寧ろウイルソンの意を迎ふる爲めに、枉げて之に贊同した。然も其の結果は奈何。肝腎の米國は之を拒斥した。ウイルソンは之が爲めに、若し憤死したと云ふも、彼は何故に死したるかの理由を發見するに難くない。

* * *

國際聯盟効用の稀薄

世界の最大富國にして、且つ最大强國たる北米合衆國が、國際聯盟條約を蹴り飛したとすれば、國際聯盟なるものは、全く無意義と云はざるも、其の意義の甚だ心細きは、說明を俟つ迄もなし。或物は皆無に優る。吾人は國際聯盟の存在を無用とは云はないが、但だ其の効用の寧ろ甚だ稀薄である可きを悲しまざるを得ない。

利害相反する英佛

歐洲の天地は、今尙ほ恐怖の天地だ、猜疑の天地だ、而して最も不安の天地だ。英と佛とは世界大戰中は、互ひに死生を與にした。然も一たび休戰となれば、其の利害は自から相反せざるを得ない。今其の重なる一を擧ぐれば、英國の利益は、獨逸を速かに復興せしむるに在り、而して佛國の利益は、成る可く獨逸を復興せしめざるにあり。英國の憂は、唯だ獨逸が英國の海權を侵蝕し、英國の世界的政策の邪魔をなすにあり。此の憂さへ一たび除き去れば、獨逸は英國に取りては與國であり、且つ友國である。特に工業及び商業上には、一方に於ては競爭者でありつゝも、他方に於ては得意である。英獨の間、共存同榮は寧ろ當然の事である。

* * *

英人と獨逸の復興

されば休戰以來、英人は寧ろ其の死生相許す友であつた佛國を閑却して、却て今迄不俱戴天の仇としたる獨逸の復興を、是れ急とした。此に就ては獨逸人は左程英人の恩惠に感激せざるも、佛人としては餘りに英人の現金的なるに、心中甚だ穩ならざるものゝあつたことは勿論だ。此の如くして英佛の國交は、最近十年間、時に近く、時に遠く、時に親、時に疎、其の時と場合とによりて、若干の相違はあるも、大體に於て、決して大戰最中の如き、親善を視ることは克はなかつた。而して今日と雖も、固より其通りである。

* * *

佛國の對英準備

佛國は決して自から進んで、英國を侵さんとするの野心を懷いてゐない。されど若し英國が餘りに佛國を袖にするならば、それ相當に報復するだけの準備は、一日と雖も忘れてゐない。それは潛航艇と、航空機とである。此の二利器は、佛國の賴りて以て英國を脅威するに足るものと信じてゐる。而して今後とても如何に英國と握手しつゝあるも、此の兩刀—潛航艇と、

飛行機―を帶することを、決して忘却することはあるまい。

（昭和四年八月六日稿）

恩讐元我が利害より發す、之を固定的とするは、刻舟求劍者流のみ。

佛國の畏怖は獨逸

然も佛國の最も畏怖するは、獨逸である、獨逸の復讐である。此れは佛國の凡有る政派、凡有る階級、凡有る人士を擧げて、殆んど皆な然りとする。云はゞ佛人の獨逸人を畏るゝは、鼠が猫を恐るゝ如く、蛙が蛇を恐るゝ如く、今日では殆んど先天的と云ふ可き程だ。固より一八七〇―七一年役、及び最近の世界大戰の實物教訓に徴すれば、佛人として斯く恐怖するは、決して非常識的ではあるまい。此に於てか佛人は英人の對獨政策に於ける寛典主義に對し、嚴罰主義を取るの止むなきに至つた。

* * *

佛人常然の要求

人或は佛人が獨逸に對して、餘りに意地惡く、餘りに執念深く、餘りに復

雄心の強きを疾むも。その實は佛人をして此の如くならしめたるは、獨逸人であること云はねばならぬ。佛人が斯くあるは、獨逸人を怨むこと云ふよりも、畏るゝからだ。特に兩國に於ける人口增減の割合から見れば、佛人がその やがて自國に倍する獨逸人口の增進を見越して、心配を燒くのは、決して無理からぬことだ。さればフォッシュ元帥が、是非共佛國の國境を、ライン河岸まで進め、此の河を以て、國防の境界線とするの計企を建てたるは、佛人の見地からすれば、寧ろ當然の要求と云はねばならぬ。

クレマンソー

* * *

佛國が連戰連敗し、氣餒る力盡きんとするに際し。佛國を九死より一生を贏ち得せしめたるものは、フォッシュ元帥と、クレマンソーとのみ。然もフォッシュ元帥をして、其力を効さしむるに至らしめたるもの、亦た固とにクレマンソーの、慨然として身を挺して、國難に衝り、一國の元氣を振作したるが爲めのみ。乃ちクレマンソーの如きは、佛國再生の恩人だ。然るに佛人は全權として彼がヴェルサユ會議に臨むや、餘りに讓歩し過ぎて、英米の爲めに、佛國の利益を犧牲としたりとて、頗る彼に不滿であつた。是れが彼の大統領たる可くして、たる能はざりし總ての理由でなき迄も、重なる理由の一であつた。然も英米兩國では、クレマンソーが、餘りに佛國一天張りにて、世界政局の平衡を無視したりとて、非難したる者も少くなかつた。

* * *

條約の空文と佛國の懊惱

佛國の對獨要求は、英米兩國の爲めに斥けられ。佛國の全權は內外に對して、殆んど其の立場を失はんとしたるに際し。若し獨逸が今後佛國に向て、侵攻的態度に出づる場合には、英米兩國は、佛國を扶けて、獨逸に當る可しとの條約にて、漸く一通りの申譯は立つた。而してそれも米國元老院がウ

イルソン大統領によりて商議せられ、締結せられたる一切の條約を拒斥し去りたる爲め。從て英國も亦た同樣の義務を免れ。此の如くして此の條約は全く一個の空文となり了りぬ。佛國の懊惱や、知る可きのみ。

* * *

佛國とロカルノ條約

佛國は一方に於て英國の賴む可らざるを見て、ポーランドに結び、其他歐洲中部の新設諸小國に結び、自から中歐同盟の盟主となりて、萬一の際には、犄角の勢もて獨逸に當らんと試みた。佛國は土耳其に結び、英國の親希臘政策の裏を掻かんことを企てた。英國の佛國に對する債權に就ても、兎角の悶著は絶えない。然も一方には公平にして正直なるチェンバレーンの如きあり、他方には佛人としては、比較的胸襟の濶達なるブリアンあり。而して獨逸人としては、亦た最も時務に通曉するストレーゼマンあり。此に始めてロカルノ條約出で來りて、漸く曲りなりにも佛國の恐怖心を安んずることを得た。そは若し獨逸が進んで佛國を侵さば、英國は佛國を扶けて獨逸と戰ひ。獨逸が佛國より侵さるれば、英國は獨逸を扶けて佛國と戰ふ可しとの約束だ。此の約束は伊太利のムッソリニなども、能く其の成立の深旨を諒として、之に贊同したから、此に於て歐洲和平の基調は、今や此のロカルノ條約を中心として、存立することゝなつた。是れ實に一九二五年（大正十四年）十月の事だ。然も此れが爲めに、歐洲に於ける不安は、全く一掃せられたと斷言し得る者は誰もあるまい。

（昭和四年八月六日稿）

第三　前門の狼

戰捷者英國の悲哀

英國民は勘定高き國民として、知られてゐる。戰爭の爲めに、幾許の犧牲を拂はねばならぬ事は、固より覺悟の前の事であつたらう。然も彼等は果して何の得る所があつた乎。如何なる戰爭でも、英人は其の一回だけは必らず捷つ、それは最後の戰鬪であると云ふ通り、彼等は遂ひに戰捷者として、足掛け五個年の大難場を突破し來つた。然も所謂る戰捷者の悲哀は、彼等によりて見事に證明せられた。

* * *

戰敗者獨逸の恢復力

若し戰捷者たる英國の損害が、戰敗者たる獨逸のそれ以上と云ふ能はずんば、恐らくは其の以下として、甚だしき距離はあるまい。戰敗の獨逸が列

國の爲めに、其の軍備を制限せられたのは、却て仕合せだ。此れが爲めに彼は不生產的の仕事に、國費を消費するの必要が無くなつた。而して各國に對する賠償の爲めには、是非共其の生產力を增加せねばならぬ必要がある。此の如くして、獨逸は殆んど順風に帆を擧げて、恢復の航路を奔りつつある。

* * *

獨逸國民性の兩面

トライチケが、徒らに獨逸民族の自尊心を長養し、其の褊狹なる國民的精神を鼓吹したる爲めに、獨逸は遂ひに世界を敵とせねばならぬ事となつたと云ふ。此れも一理である。されど世界を敵としても、大なる不面目を暴露しなかつたのは、何の爲めぞ。世界の戰敗者にてありつゝも、戰勝者をして一懼一妬せしむる迄に、復興しつゝあるは、何の爲めぞ。吾人は獨逸の國民史家が、其の國民を敎訓するに於て、其道を誤りたるものあるを諱

まず。されど獨逸國民をして今日あらしめたるもの、是れ誰の力ぞ。吾人は楯の兩面を見ねばならぬ。トライチケは、決して獨逸國民に、一切の禍害を寄與したる僞豫言者ではない。

＊　＊　＊

英國々論の遲疑沈吟猶豫

吾人は今日に於て、此の全き意味にて國運を賭して戰ひたる英國が、此の大戰によりて果して何物をか贏ち得たるを疑はねばならぬ。戰爭の間際に至るまで、英國の國論は、遂ひに一定しなかつた。英佛兩國は法制上の義務はなきも、若し佛國が獨逸より襲撃せらるゝ場合には、英國は進んで之を援助す可き道義的義務が存してゐた。然も英國は此の道義的義務を遂行するに於て、遲疑し、沈吟し、猶豫した。而して此の未定と云はんよりも、不定の態度が、獨逸をして、最後の手段に訴ふるを敢てせしめた。

＊　＊　＊

斷乎の決心を缺く

若し英國が當初から斷々乎として、獨逸が佛國を侵す場合には、英國は遺憾ながら獨逸と干戈の間に相見えざるを得ずと、明々地に正言したらんには、獨逸は決して佛國を侵さず、既に佛國を侵さずんば、世界的戰爭を見る可き必要は無かつたであらうことは、世界の公論とする所だ。

＊　＊　＊

チャーチル氏とスペンダー氏

此に對して英國のチャーチル氏は、是れを當時の英國に向て望む可き事にあらずとして辯じて曰く、

若しその場合、外相グレー子をして斯く颺言せしめん乎。內閣の五分の四と、下院の四分の三は、何れも之に異存を申し出し、首相アスキスは辭職し、其の內閣は、四分五裂せん。苟も國民的後援なくして、獨逸を威嚇するも、將た何の用をか做さん。（世界大戰後日譚）

と。されどスペンダー氏は、之を評して曰く、

是論未だ獨逸側の論者を折服す可らず。獨逸側の論者は斯く云うであらう。英國の內閣は、斯く迄薄弱にして、其の正しき決斷力が缺乏してゐた乎と。（一九二八年三月七日、英國「デリー・ニュース」）

此れは如何にも尤の言だ。

* * *

英國の自業自得

獨逸人が英國は最後まで、戰爭には與せぬものと見縊つたのは、獨逸人の誤算にして、彼等は之に對しては、相當以上の過料を償うた。然も若し英人にして、最初から其の決心を表明せしめば、獨逸人も必らず考慮したであらう。其の九分九厘の所に於て、漸く之を表明し。獨逸人をして、英國は背後から人を刺す臆病にして、且つ狡猾なる者と罵らしめたのは、獨逸人の自個の不明を自白するに過ぎざるも。然も英人の其の國際的打算主義が、却て最後に戰渦の眞中に投ずるを、餘儀なからしむるに至つたものと云はねばならぬ。されば如何に其の戰捷の代價は過大にして、總勘定に於ては、戰捷者の空名を博しても、得失相償ふに至らざるに至らしめたるも、是れ實に自業自得と云ふの外はあるまい。

（昭和四年八月六日稿）

第四　後門の虎

贏得たる所幾許

英國は大戰によりて、何物を贏ち得たる。其の重稅と、其の國債と、而して世界的債權國の位地を顚倒して、債務國たらしめたること、二百五十萬內外の失業者と、而して勞働黨の勃興以外には、殆んど此れと云ふ目欲しきものはあるまい。

* * *

競爭者米國の勃興

併しそれよりも大なる得物は、米國の勃興であらう。諺に前門狼を禦げば、後門虎を進むと云ふ。英國が財布の底を拂ひ、最後の血の一滴をも愛まずして、獨逸と戰うたのは、英國の世界的競場の敵手たる獨逸を挫かんが爲めであつた。此れは正しく其の目的を達し得た。未だ完全とは云はざるも、當分の心配無き迄に達し得た。されど戰爭の結果は、獨逸よりも英國に取りては、油斷の出來ない競爭者は現れ出でた。そは申す迄もなく北米合衆國である。

* * *

米國に調停の機會

若し合衆國が、眞に世界の平和の爲めを謀らば、歐洲に於ける兩交戰者の未だ全く疲れきれざる以前に、調停を試む可き機會は、決して皆無ではあるまい。現にチャーチル氏の如きは、一九一四年基督降誕節の前後を以て、米國が調停に乘り出す可き第一の、而して最善の機會であつたと云うてゐる。（世界大戰後日譚）されど米國は遂ひに其の機會を逸し去つた。而して虎疲れ、龍困み、兩交戰國側の相共に屛息せんとする一時に、悠揚として、協商國側に乘り出し來つた。

* * *

當時米大統領の氣分と措置

極めて平たく云へば、米國は中立國として、其の贏け得らるゝ丈の利益を十二分にも、十五分にも取得し、而して後戰捷者の仲間に加入して、其の重なる發言者となつた。當時米國大統領ウイルソンが、米國大統領より一轉して、世界の大統領であるかの如き氣分もて、戰後の措置に、過重過大の發言權を濫用したことは、英、佛、伊の諸國に於て、何れも中心釋然たらざるものがあつたに相違ない。されど彼も我も泥に塗れたるに拘らず、米國のみが所謂る土著かずの新手であり。特に其の財權に於て、無限無盡の現狀を見ては、何れもが叩頭するの他はなかつたのも、無理はあるまい。

* * *

ヴェルサユ條約出來の眞相

ロイド・ジョージ、クレマンソー、若しくはオルランド其他、何れも煮ても燒いても喰へぬ代物だ。彼等が寄りてたかりて、處女然たる學者肌のウイルソンを、勝手次第に操縱して、遂ひにヴェルサユ條約は出で來つたと云ふも一說。然も吾人は寧ろ出來得る程度に於て、歐洲の諸老政治家は、ウイルソンの意を承奉し、或は屈從し、或は詭隨し、萬已むを得ざる場合に於てのみ、之と抗論し、之を辯正し、之をして修删訂補、聊か其の宜しきを得んことを勗めたと云ふの、寧ろ眞相を得たるに幾きを認めざるを得ない。

* * *

第一の被害者は米大統領

要するにウイルソンは大統領であるも、其の所說は、彼の一家言にして、決して國論を代表したるものではなかつた。然るに歐洲の諸老政治家が、ウイルソンを宛も米國の代表者として取扱ひ、其の所說を規準として、ヴェルサユ條約を編制したるは、實にウイルソンの爲めに、一杯喰はされたるものにして、彼等としては實に大なる買被りであつたと云はねばならぬ。されど遂事は咎めず、往事は追はず。折角の國際平和聯盟の如きも、其の

主たる米國は脱退し、會社創立の發起人は、創立後には其姿を隠くし、賛成者のみにて、其の會社を組織するが如き、異常なる光景を現出したるは、如何にも醜體千萬と云はねばならぬ。されど此れはウイルソン氏が、故意に背負投げを、英、佛、伊諸國に喰はしたのではない。若し第一の被害者を求めれば、ウイルソン當人が其尤であらう。

英國は米國の忠僕

* * *

併し斯る我儘は、米國であればこそ通用するが、他國では通用しない。米國では二個の標準がある。一は他國を律するもの、一は自國を律するもの。而して兩者は各〻其用を殊にしてゐる。米人は他國に向ては、其の信義を責め、其の約束を厲行せしむるも、自國に對しては、頗る寛大と云はんよりは、一切無頓著のことが少くない。而して英國は、此の世界の暴君とも云ふ可き米國を擁立するの元勳であつた。然り英國は實に米國の忠僕と云はねばならぬ。英國こそ實に好き面の皮である。

（昭和四年八月六日稿）

多欲却是多損。

第五　猫乎虎乎

英國の二大脅威

如何に先見達識の英國政治家でも、大戰後に於て、米國が斯くまで增長せんとは豫期しなかつた所であらう。戰前の獨逸と、戰後の米國とは、英國に取りて何れが尤も脅威である乎、何れが尤も苦手である乎。英人は容易に之を口外しない。然も其の口外しないこゝろに於て、却つて米國が獨逸に比して、一層の脅威たり、苦手たるを察す可きではあるまい乎。

* * *

先進者と後進者

英國の獨逸に對する、宛も先進者が後進者に對する態度であつた。英國女皇は獨帝ウイルヘルム二世の祖母にして、エドワード七世は、其の叔父であつた。乃ち此の家族的干係が、宛も國家的干係を說明するに足るものがあつた。

英獨相互の氣分

されば極めて打ち割りて云へば、英國では獨逸をナニ小癪な、小悴めがと云ふ樣なる態度であり。獨逸ではナニ何時迄も子供視せられてたまるもの乎。お前が一人前なら、此方も一人前だ。餘りに威張るなよ、今に物見せ呉れんぞとの意氣込であつた。固より表面では飽迄對等の交際ではあつたが、英國は未だ曾て其の一日の長者たることを忘れなかつた。乃ち英國の獨逸に對するや、恒に其の擡頭せんとしつゝある獨逸の首元を抑へ付けんとし、獨逸は之に反して、唯だ一寸でも一分でも、英國を凌駕するを以て、畢生の目的であるかの如く、其の競爭の鋒先を、恒に英國に向けた。

* * *

英米の歷史的感情

英國の米國に於ける、之を歷史的に見れば、其の叛民の團體だ。血は水よ

り濃なりとの言葉通りに、特別の親みを持つ可きであるが、其實は英國の米國に對する、從來に於ては、決して其の親類らしき親しみを示さなかつた。而して米國の英國を見る、其の專制君主國であつた印象は、長へに存して、容易に拂拭せられなかつた。此の如く英米兩國間に於ける歷史は、双方の立場に於て、一方からは暴君國とせられ、他方からは叛民國とせられ、未だ公平正當なる歷史の眞相を解得する者は、兩國の間に、僅有絶無の姿にてあつた。

* * * *

英國の對米態度一變

米人は決して英人の南北戰爭に際して、南部に同情したるを、友好的態度とは思はなかつた。英人はヴネヅウェラ事件に於ける、米國の高壓的措置に釋然たる能はなかつた。斯る類例は、双方の間に幾許もある。但だ英國の獨逸との干係が、追々と不良好に赴きつゝあるを見て、殊更らに米國の驩心を得んことを勗め、世界大戰以前約十年間は、英國の米國に對するや、殆んど從前の態度を一變し。寬大仁愛なる長兄が、我儘放恣なる頑弟に對する如く。溫言懇情、有らん限りの力を傾けて、偏へに米國の心を我に繫ぎ、我に向はしめんことを勗めたるは、殆んど英國の國是とも云ふ可き程であつた。

* * * *

大戰後米國獨り肥大となる

世界大戰中、英國が米國に盡したる凡有る手段、バルフォア、ノースクリッフ、レーヂンク諸特使の派遣、及び當時の駐英米國大使ペーシの斡旋等の如きは、今更ら歷擧する迄もなく。獨逸の無制限的潛航艇の活躍は、遂ひに大戰の終幕に近づくに際して、米國の協商國側加入に到らしめた。此れは英國に取りて最も感謝す可き事であつた。されど其の結果は、恐らくは英國に取りて、最も意外であつたらう。之を比するに、北條氏の亡ぶるや、東

には新田氏ありて鎌倉を平げ、西には楠木氏ありて勤王の唱首となつた。然も其の戰功は却て戰はざる足利尊氏に歸した。米國の世界大戰に於ける、亦た此の通りであつた。戰前の米國は決して猫では無かつたが、亦た決して虎でも無かつた。されど戰後の米國は、虎よりも猛かつた。協商國側も、同盟國側も、卽ち戰捷者も、戰敗者も、何れも疲困してへと〳〵になつた而して此際に於て、獨り本來の力を保持したのは、米國であつた。米國は獨り保持したるのみならず、列國の肉を啗ひ血を啜りて、自分が肥大となつた。其の目的は必らずしも然らざるも、其の結果は、列國は何れも米國を肥大ならしめんが爲めに、世界大戰に從事した。其中に於て特に英國を以て然りとする。

（昭和四年八月七日稿）

戰後の米國虎より猛し

第六　虎の餌食

一躍債權國の米國

凡そ世界の成金國として、米國の上に出づるものはない。双方の交戰國は、何れも其身を殺いで、米國を肥さんが爲めに、鎬を削つた。而して從來とても、米國は富國であり、從て又た強國であつた。但だ米國は農業及び工業に於ては、世界に雄長を爭うてゐたが、資本國としては、遺憾ながら債務者たる資格を脫し得なかつた。然も一たび大戰の幸運に乘じ、一躍して債務國たる彼は、債權國となつた。乃ち此の一點に於ては、英米兩國は、互ひに其の位地を交換し、顚倒した。從來英國が米國の驕慢を制し得たるもの、唯だ一の資本であつた。然も今や其の資本さへも、英國は之を米國に仰がねばならぬ始末となつて來た。英國の立場の困難なる、亦た知る可

きのみ。

＊　＊　＊

米國の機嫌取りに汲々

されば大戰後の英國の國是は、偏へに萬障を排して、米國の機嫌を取るにあつた。此れは何れの黨派を問はず、殆んど各黨申し合せたるかの如く、一致してゐた。乃ちヴェルサユ會議より、華盛頓會議に及び、華盛頓會議より壽府會議に及ぶ。英國の政策は、一以て之を貫いてゐる。中にも壽府會議に於ては、英米海軍の專門家、各〻其の所見を殊にして、遂ひに成案を見るに至らずして止みたるも。此れは英國としては、其の最後の生命たる海權問題に、干係あるものなれば、如何に米國の驩心を得るが國是なればとて、米國の爲めに、自己の生命の綱までも、捧ぐる程の決心はつかなかつたものと見ねばならぬ。

＊　＊　＊

自國本位の英國

英國は果して中心より米國を愛しつゝある乎、兄弟視しつゝある乎、特別なる友邦視しつゝある乎。そは吾人の關知する限りでない。されど萬障を排しても、米國を瞋らせない樣に仕向くることは、その重なる國策の一と云はねばならぬ。日英同盟の如きは、正しくその爲めに犧牲となつたものだ。平たく云へば、英國は米國と新驩を結ばんが爲めに、日本との舊驩を閑却したのだ。吾人が斯く云へばとて、決して英國を不人情國、現金國、輕薄國、損得勘定國として咎め立てするではない。英國は自國本位から割り出して、日英同盟を締結したるもの。其の自國本位の打算から、日英同盟を拋棄するも、決して不思議ではない。

＊　＊

結果は虻蜂取らず

併し此れは英國として得策であつた乎、失策であつた乎、そは未だ容易に斷言が出來ない。何となれば日本を捨てゝ米國を取るを得れば、小蟲を殺

して、大蟲を活かすことゝなるも。是迄の成行から見れば、英國は日本を餌として、米國に咯はしめ、其の驩心を得んことを勗めたれごも。米國は此れが爲めに、毫も英國に向て感謝する所がない。其の結果は蓋し虻蜂取らずとなるの虞はない乎。賴ひに日本人は神經が遲鈍にして、外交問題に無頓著なれば。日英同盟の締結も、殆んご自然的に出で來りたるもの、如く考へ。其の廢棄も亦た同樣に考へ。爲めに英國の日本に對する措置振りに對して、左程の不快を感ぜざりしは。英國に取りては勿怪の仕合せと云はねばなるまい。

* * *

日英同盟と英國の利得

此の日英同盟は、日本に取りても、相當の利得あつたに相違ない。吾人は之を認むるに吝でない。されご英國に取りて、より以上の利得あつたことは、是亦た掩ふ可らざる事實だ。日露戰爭は、或る意味に於ては、日本が英國の爲めに、手を火中に投じて、燒栗を拾うたものだ。由來英國の東方に於ける深憂大患は、露國であつた。此の一擧によりて、英國の印度に於ける脅威、波斯に於ける危機、而して支那に於ける不安は、殆んご悉く一掃せられた。此の如く日本は英國の爲めに東洋に於ける番犬となり、獵狗となり、それぞれの役目を勗めた。而して勗め了れば、日英同盟は、更らに英、米、日、佛四國の太平洋平和協約てふ、大なる名ご小なる實の爲めに廢棄せられた。平たく云へば、米國が恒に日英同盟を氣に病みつゝあるから、取り敢へず先づ之を撤去して、英國に對する米國の驩心を求めたのだ。

笑止千萬の英國

英國ごしては尤の次第であらう。但だ米國が之を左程有り難がらなかつたのが、英國ごしては笑止千萬の事であつた。されば一九二七年の夏、壽府會議に於て、英米の海軍補助艦協定問題に就て、其の協定の成らざるや、英國の論者中には、日英同盟の再興を主張したる者さへあつた。其の申分

は、日英同盟は、米國の指金にて罷めたのだ。今や英米の協定が不成立ならば、此上は日英同盟に還元するの他はあるまいと。此事に就ては、前タイムス主筆スチード氏の如きは、其言の輕卒なるを指摘してゐる程だ。（參照　一九二七年七月廿二日『タイムス』紙上）

（昭和四年八月七日稿）

第七　世界大戰の代價幾許ぞ

戰爭の破壞力

抑も世界大戰の代價は幾許ぞ。そは勘定の方法に於て、自から相違があるであらう。

今や戰爭の破壞力は、第二十世紀に於て、從前に比して、一千倍し、更らに幾何學的進歩をなしつゝある。吾人の所謂る世界大戰に於て、四個年強に於て戕殺したる兵士、彼是二千萬人、而して間接に戕殺したる兵士以外の者、始終を通じて、是復た約二千萬人に上る。然も一九一八年（戰爭休止）以來、戰爭の技術は、急激に進歩し、今や一隊の飛行機は、一夜にして、大都府の市民を一掃し去ること難きにあらず。

*　*　*

經濟上の損害

世界大戰の財政上の損害は、約三百兆弗と計算せらる。僅かに一個年半間交戰に參加したる米國さへも、生活費は、倍加した。歐洲に於ては、それが三倍し、四倍し、更らに幾倍しつゝある。而して資產上の損害は三十兆弗にして、善良なる船舶三千隻以上、一千五百萬噸强は沈沒せしめられた。幾千の市と邑とは破壞せられ、十年に亘りて、經濟的組織は、瓦解せられ。世界に有限なる銅や、フラチナムや、石油や、其他貴重の資源は、恐る可き範圍に涉つて消耗せられた。此の戰爭によりて生じたる、人類の苦惱の甚大なるは、宛も現代に於ける天文學上の數字同樣、到底想像の能く及ぶ所ではあるまい。

* * *

戰爭人類を滅絕

然も若し將來更らに戰爭出で來るあらば、其の破壞力は、戰線の背後に於て、最も其の效果を增大ならしむ可く。乃ち凡有る慘痛なる方法もて、全民人を苦惱せしむるであらう。されば若し人類が、戰爭を滅絕せずんば、戰爭が人類を滅絕するや必せりと云はねばあらぬ。(The New Morality by Drake)

* * *

予は以上の數字に對して、必らずしも裏書せんとする者ではない。されど其の戰禍の想像以上に甚大であつたことは、決して疑を容れない。而して前記よりも、寧ろやゝ精確に幾しと覺ゆるは、英國の陸軍元帥サー・ウイリアム・ロバートソンの演說の一節だ。

通計約七百億磅

總ての交戰國を通じて、直接に支出したる金額は四百億磅にして、間接の代價、卽ち財產の破壞、船舶、農業、工業の損害、其他を計上すれば、三百億磅に上るであらう。卽ち通計約七百億磅の代價となる。

* * *

生命の損害

生命の損害は約一千萬人、過去一百二十年間の一切の戰爭—其中にはナポレオン戰爭をも含む—の損害に比して、倍數に上りてゐる。右戰死者以外、戰傷者亦た二千萬人を下らぬであらう。今後若し他の戰爭出で來らば、其の禍害は、世界大戰に幾倍するや、未だ知る可らずだ。蓋し空中攻撃と、化學的新發明品の使用とは、非戰鬪員に向て、殆んど無限の慘毒を加へずんば止まぬからだ。（一九二八年十月十四日、倫敦發行　Public Opinion）

*　*　*

有史以來の慘毒

以上の數字は前記と比して、必らずしも一致しない。されど何れにしても其の世界の慘毒は、世界有史以來、凡有る慘毒に超過すると云ふも、過言であるまい。そは一切の文明、一切の人智を、只だ悉く人を殺すの一點に集中して、之を無制限に、之を最上程度に使用したからだ。而して此の如き

代價を拂うて得たる物は幾許ぞ。

（昭和四年八月六日稿）

殺人の效果は、更により有力なる殺人法の發明のみ。

第八　赤化乎金權化乎

大戰影響の計上

今日に於て世界大戰の總勘定をなすは、恐らくは大早計であらう。されど大戰後既に十餘年を過ぎてゐる。吾人は總勘定でなくとも、一二其の戰爭の影響として、計上す可きものが無いでも無い。

* * *

露國の一大變革

露國に君臨したるロマノーフ家は、今ま焉くに在る。墺洪國に君臨したるハプスブルグ家は、今ま焉くに在る。獨逸聯邦の總統たりしホヘンツオレン家は、今ま焉くに在る。而して宛も世界的一大戲曲師によりて作爲せられたる芝居とも見る可き、赤化的勞農政府は、露國に構造せられ、傲然として世界の脅威となりつゝあるではない乎。吾人は露國に於ける此

の一大變革を以て、實に人生無常の實物教訓と看做さゞるを得ない。

* * *

女性解放問題

若し仔細に吟味したらんには、世界大戰は、從來未だ解決し得なかつた至難の問題をば、雜作もなく解決し去つた。例せば女性解放問題の如きが、その一であつた。是れは大戰に於ける總動員の必須が、女性をも男性同樣の義務を負擔せしめたから、其の權利も亦た從て同樣たらしめたのだ。此の如くして殆んど一百年の歲月を費して、未だ容易に其の目的を達し得なかつた男女同權問題は、總てとは云はぬが、其の過半を解決した。

* * *

凡有る婦德の破壞

されど女性の解放は、同時に家族制度の瓦解ともなり、女性貞操の蹂躙ともなり、凡有る婦德の破壞ともなつた。伊太利の史家フェレロ氏の如きは、世界大戰の結果として、喫烟の普及を擧げてゐる。曰く大戰前迄は、男子

さへも喫烟するには、時と場所とを限りてゐた。然るに戰後は男子は勿論女性さへも、時も場所も、殆んど頓著する所なく喫烟し。其風は社會の凡有る階級に普及しつゝあると。此れも其一として數ふ可き程の價値があると乎、否乎は姑らく措き、其一には相違あるまい。

* * *

米露二國の脅威

されど何と申しても、世界大戰の主なる結果は、一方には世界の金權國として、北米合衆國を特産せしめた。他方には世界の赤化國として、露國勞農政府を特産せしめた。而して世界は腹背に此の二國の爲めに、凡有る脅威を受けつゝある。

* * *

兩國共に一種の帝國主義

北米の金權國と、北露の赤化國とは、一は資本を代表し、他は勞働を代表す。一は有産者を基調とし、他は無産者を基調とす。其の性質の相ひ反するが如きに似たれども、されどそは皮相の見にして、若し一膜を排し去れば、彼等は何れも一種の帝國主義者である。即ち露國は赤化主義を以て、世界を統一せんと欲し、米國は金權主義を以て、世界を統一せんと欲す。

* * *

赤化主義の氣魄

元來世界大戰は、獨逸の殖産的帝國主義と、英國の殖産的帝國主義との決闘であつた。而して此の決闘は、勝利の團扇は英國側に揚つたが、其實は双方共に斃れたと云ふ能はずんば、殆んど斃れんとした。而して此の決闘の最後に出で來つたのが、即ち赤化露と黄金化米とである。赤化露は、米國に比すれば、凡有る點に於て、貧弱だ。されど彼等は列國が所有せざる或物を所有してゐる。それは列國は皆な其日暮らしの臨機應變者であるに拘らず、赤化露は、正にせよ、善にせよ、不善にせよ、一個の

主義を所有してゐる。それが所謂る赤化主義だ。此の主義は、其の本尊レニンの時に於てさへも、變通する所あつた。されば其の死後に於ては、多少の移動は免れまい。されど兎にも角にも赤化主義もて、世界を革命せんとする氣魄は、今猶ほ依然存してゐる。

* * *

赤化露の世界的恐怖

世人は理想の無力を說く。然も是れ只だ沒理想者の妄想のみ。若し今日の勞農政府から、此の赤化主義を取り去らば、彼等は唯だ烏合の衆のみ。何爲ぞ世界の恐怖たるを得ん哉。然も露國の赤化主義に對しては、世界に畏ろしき者あるを知らざる北米金權國さへも、極力其の侵蝕を豫防してゐるではない乎。米國の露國赤化主義を畏るゝ、毒蛇猛獸よりも甚しきを見れば、亦た以て如何に其の脅威力の深甚、重大なるかを知る可きではない乎。

（昭和四年八月七日稿）

* * *

二大勢力の勃興

第九　世界二分の豫想

世界大戰の結果として、二大勢力の勃興―米國と露國―は、苟も具眼者にして、之を見逃がすものはあるまい。乃ち英國の哲學者バートランド・ラッセルの如きも、亦た曾て英國倫敦の「デリー・エッキスプレス」紙上に於て、左の如き意味の言をなしてゐる。

* * *

特性發揮の尋繹

此の世界の文明は、戰爭によりて、或は全滅せらるゝかも知れない。若しくは羅馬帝國の末路の如く、漸次に衰亡するかも知れない。然も苟も生存せん乎、必らず或る特性を發揮し來るであらう。予は茲に此の特性の發揮に就て、聊か尋繹を試みねばならぬ。

* * *

科學應用の結果

百工器械の應用と共に、否な此の應用の爲めに、社會は愈よ倍〻組織的となり行く。印刷、鐵道、電信、放送等は、大なる組織―近世的國家、若しくは國際的財務―の爲めに、技術的用を辨じ來つた。此れと共に、科學應用の結果は、更らに他の一大現象を來たした。そは世界の大なる一致である。十六世紀以前は、米國や、極東は、歐洲とは沒交涉であつた。然も爾來は時と與に、其の干係は逾よ緊密となりつゝある。羅馬に於けるオウゴスタス帝や、支那に於ける漢の皇帝が、何れも同時代に於て、各自凡有る文明世界の君主であると想像したるが如きは、現代に於ては、とても有り得可き事ではない。

世界悉く至切至緊の干係

* * *

今日に於ては世界の何れの部分も、他と部分と順緣にせよ、逆緣にせよ、必らず至切至緊の干係がある。乃ち西藏國の達賴喇嘛の如きも、幾百年世界の一切から隔離しつゝも、今は英佛の爲めに、交も誘はれて、其の煩に勝へず、北平に逃げ出したが、其處にても亦た同樣の五月蠅さに居たゝまらぬ程であつた。西藏の達賴喇嘛、尙且つ然り、其他は推して知る可きのみ。

全世界統制中心の發生

* * *

此の如く緊密なる社會の組織と、世界に於ける大なる一致との二前提より して、若し世界の文明が、今後益〻發展す可しとせば、勢ひ全世界を統制する中心的勢力を生じ來らねばならぬ。左なくは爭端は追々と繁くなり、而して公共心の增長と與に、更らに激甚を加へ來るであらう。

中心的勢力は米英二國乎

* * *

予が所謂る中心的勢力とは、本式的の政府ではない。恐らくはそれは世界諸財務者―世界の各金融業の類を云ふ―の合同から成り立つものであら

う。平和は彼等の利益だ。交戰國に貸したる金は、動もすれば損失する虞れがある。故に彼等は合同して、各自の利益の爲めに、世界の平和を謀る必要を感ずる。若し彼等によりて統制せられずんば、一の有力なる國―北米合衆國―か、左なくば有力なる國の提携―米國と英國―によりて成り立つであらう。

＊　＊　＊

世界は米露二國に分割

然も世界が此の情態に達する以前、尙ほ長期間に於て、世界は米國と露國とに分割せらるゝであらう。米國は西部歐洲と、各地に於ける大英帝國の自治領を支配し、露國は一切の東亞全部を支配するであらう。此の二大國は、各〻防禦には強く、攻撃には弱く、從つて百年若しくはより以上に存續するであらう。

＊　＊　＊

中心的勢力の所有者は誰ぞ

されど遂には―遲くとも二十一世紀の間に於て―世界文明の全滅乎、或は全文明國の人士が、能く自ら悟る所ある乎、若しくは米國が十分の力もて、之を支持する乎。何れにしても世界の文明が破滅して、再び野蠻に復ることはあるまい。果して然らば、其の中心的勢力の所有者は何者たる可き。

＊　＊　＊

和戰の決は財務の最上權者

第一に最初にそれは和戰の問題を決し、且つ若し戰爭ならば、何れが勝つ乎を決する者であらねばならぬ。此れは形式的政治上の支配者によりて定めらる可きものでなく、財務の最上權者によりて決せらる可きものだ。戰爭が科學的となると同時に、彌よ經費が嵩み、從つて若し世界に於ける各財務者が一致するに於ては、即ち彼等が金融を承諾し、若しくは拒否するに於て、和戰の問題は定まる。

＊　＊　＊

* * *

記者は唯だ以上に於て、ラッセル氏の意見の大旨を紹介したるに止まる。然も此を見ても、如何に世界大戰が、何者を勃興せしめたるを知るに於て餘師あらむ。

（昭和四年八月九日稿）

第十　誰か英國を智者と云ふ乎

英國の生命は海軍

英國は國是として、米國の驩心を得んことを勗めてゐる。云はゞ英國の國是は、對米叩頭主義と云ふも酷評ではない程だ。されど唯だ一事の相ひ讓らざるあり。そは英國の世界海軍國としての第一流の位置だ。百事君に任ず、只だ此の一事は吾に任ぜよとは、英國の米國に對する申分だ。此れは決して英國が世界第一の海軍國であるてふ看板の爲めではない。英國は決して看板の爲めに、他と爭ふ程の一本調子者ではない。此れは正直のところ英國の生命であるからだ。英國海軍は、英國歷史的帝國主義の產物にして、英帝國の世界に於ける平和と安寧は、偏へに此によりて繫がれてゐる。而して英本國の死生存亡、亦た只だ此によりて繫がれてゐる。

＊　＊　＊　＊

獨逸の海軍擴張と英國

英國は當初から獨逸と戰ふ積りではなかつた。獨逸が全國を擧げて陸兵となすも、英國は何等頓著する所は無かつた。但だ獨逸が海軍を擴張し、之を擴張し、之を擴張し、英國の後を蹈み、やがては英國と併行し、更らに之を追ひ超さんとするを見て。英國も今は致方なしと其の覺悟の臍を固めたのだ。されどそれさへも、出來得可んば、平和的解決を企て、所謂る海軍休日（ホリデー）の相談さへも、持ち込んたのだ。されど獨逸の驕慢なる、之を常識的に取り扱はず、遂ひに最後の大戰まで落下せしめた。

＊　＊　＊　＊

獨逸に代る米國の競爭

此の如く英國は、平和の爲めには、總ての物を犧牲とするが。海權の爲めには、その平和さへも犧牲とするを憚からない。然るに北米合衆國は、實に英國に向て、此の海權の新たなる競爭者として出で來り、且つ出で來りつゝある。吾人が新たなると云ふは、從來獨逸が其の競爭者であつたからだ。而して北米合衆國は、實に獨逸に代りて、海軍競爭の舞臺に乘り出し來た新手であるからだ。

＊　＊　＊　＊

英獨の海權競爭

英國の獨逸に對する、之を牽制するの方法には不足なかつた。獨逸の兩隣たる露佛に結んで、前後から之を挾み擊にすることが、その一であつた。而して英國の所謂る協商は、此れが爲めに成立した。且つ獨逸は財力に於ても、長足の進歩をなしつゝあつたが、尙ほ英國に對しては、相ひ讓る所があつた。されば英獨の海權競爭は、英國に其利多くして、獨逸には其利少かつた。それにも拘らず、英國は獨逸海軍の擴張に對しては、一日も高枕安眠するを得なかつた。而して才かに大戰後に於て、此の方面の心配は休止せられた。

意外の競爭者出來

然も好事魔多く、他の方面から、意外の競爭者が出で來つた。意外の二字は、或は妥當を少くかも知れない。されど多數の人々に取りては、全く意外であつた。英人の或者は米國の海軍擴張は、概して對日本であると觀察した。乃ち專ら太平洋に於て、日本と雌雄を爭ふ可き前提として推定した。

* * *

米國と海軍擴張の聲言

此れは必ずしも悉く見當違ではあるまい。されど如何に英國側に於て米國の海軍擴張が、單に日本のみを相手とすると想像するも、米國彼自身が其の正面の相手は、正しく英國であると聲言するに於ては、今更ら然らずとして之を打ち消す譯にも參るまい。而して米國は實に英國に向て、斯く聲言しつゝ、否な聲言と云はんよりも、寧ろ實物教訓もて、著々之を明示しつゝあるではない乎。

* * *

米國の世界的地位

米國は支那戰國時代の秦と殆んど同樣の地を占めてゐる。陸上に於ける米國の隣邦は、加奈太と墨西哥である。前者は其の國境を守る可き一兵さへ持たない。墨西哥に至つては、歷史的に合衆國から、唯だ侵略せられ、削小せられ、云はゞ合衆國の喰み餘したる殘骸だ。英國に取りて、聊かにても頼みて以て米國を牽制す可きは、遙か太平洋の向岸に位する日本のみなれども、その日本さへも、米國の讎心を得ん爲めに、犧牲としたれば、今は正面から米國と對立するの他に、術策はあるまい。一九二八年八月英佛の間に、海軍協定が締結せられたれども、そは秘密規約にして、其の內容を知るに由なし。然も其の直接米國に對する攻守同盟でなきことは分明だ。

* * *

英國智ありや

獨逸の海權と競爭の餘、之を叩きつけんが爲めに、國力を賭して爭ひ。却

て獨逸より以上の新海權競爭者を、舞臺に誘ひ出したる者は誰ぞ。誰か英國を智ありと云ふ。

（昭和四年八月九日稿）

小黠大癡乎、小癡大黠乎。

（昭和四年九月初六）

卽今英國首相マクドナルド氏は、米國駐英大使ドウス氏と、海軍問題に付て協定し、既に十七個條を議定し、剩す所唯だ三個條のみと云ふ。然も記者は英米の海軍問題の恒久解決に就ては、今尙ほ懷疑者である。

第十一　英國の國是

世界大戰終局の際、海權に關する英米最初の折衝は、巴里の外務省に於ける、一九一八年十月二十九日、佛、英、伊、米四個國代表者の會合に始つた。當時米國大統領代表者とも云ふ可きハウス大佐は、その所謂る十四個條中の第二條を讀み上げた。

領海外に於ける航海の絶對的自由。平時戰時の差別なく。但し國際聯盟の條項を履行する爲めに、國際的作用もて、全部若しくは一部閉鎖せらるる可き海面は、此限りにあらず。

是れ實に有意か、無心かは姑らく措き、英國の海權に對する一大打擊と云はねばならぬ。

嗚呼是れ英國の國是

當時列席の英國首相ロイド・ジョージ氏は昂然として曰く、予は如何なる事情の下にも、此の個條を受容すること出來ぬ。若し今日此の個條を實行せん乎、吾人は封鎖の威力を失墜せねばならぬと。而して佛國のクレマンソー、伊國のソニノも亦た英國首相の意見を贊成した。此れは實に世界大戰休戰に先つ約二週間以前の事だ。而してロイド・ジョージ氏は更らに飜言して曰く、吾人は到底此の第二個條には同意が出來ない、若し米國が此れが爲めに、獨逸と單獨の講和を爲すが如きことあるも、吾人は之を如何ともする能はずと。而して此れはロイド・ジョージ一人の意見ではない、實に英國の國是である。

* * * * *

ウ氏訓令の握潰し

當時ウイルソン氏は、十月三十日附にて、更らにハウス大佐に向け、左の電報を發してゐる。

予は海上の自由の個條を包含せざる平和の會議には、參加する能はざる旨を傳へられんことを、貴君に依囑するを、予の職分と信ず。何となれば吾人は決して普魯西の軍國主義に向て戰ふ可く誓うたればなり。

と。然もハウス大佐は此の訓令を、其儘握中に秘めて、當時は容易く之を他に示さなかつた。

* * * * *

英國側の修正意見主張

英國側に於ては、ウイルソンの所謂る海上自由の個條は、平和會議の際まで、之を保留すると修正した。保留とは其の場合に際しては、英國側の意見を主張せんが爲めだ。而して十一月三日各代表者が、巴里なるハウス大佐の寓所に會するや、ハウス大佐はロイド・ジョージ氏に問うて曰く、御身

は海上の自由を、主義として賛同する能はざる乎と。ジョージ氏曰く、断じて能はずと。ハウス大佐の再び此の問を繰り返すや、ジョージ氏は更らに語りて曰く、

若し予之を承認せば、一週間を出ずして、他の英國首相出で來り、其の主義を承認せざる旨を断言するであらう。英國民は、此の問題に就て考察するを好まない。然り此の一點に於て。我が國民は絶對的に凝り固つてゐる。是を以て予は自から大英國民に向て之を語るを欲せざるを知りつゝ、今ま之を承認すると曰ふの無用たるを覺ゆと。

ハウス大佐の手記

* * *

尙ほハウス大佐の手記によれば。ロイド・ジョージは、左の如く曰うた。（これは此の場合か、他の場合かは、分明でないが）

大英帝國は、合衆國若しくは他の諸國の海軍に優越なる海軍を保持するが爲めには、其の最後の一ギニーをも費すを欲する。如何なる國務大臣も、此れに異なる意見を持つものは、其の位地に安ずることは出來ない。

英米海權葛藤の起因

と。此れは獨逸が休戰を申し込む以前の事だ。當時米國の參加は、協商國側に取りては、大旱の雲霓も啻ならずであつた。地獄で佛に出會したる程であつた。然るに尙ほ米國の感情を傷ふを顧慮せず、英國が諤々として海上自由の個條に反對し、單に其の細目のみならず、主義としてさへも、之を受け納るゝことを拒否したるは、如何に英國が自國の海權に重きを措いたかゞ判る。而して當初より之を知る乎、知らざる乎、兎にも角にも高壓的に之を英國に壓し付けんとしたる米國の態度も、亦た尋常ならざるを知らねばならぬ。此の如くして英米兩國の海權に關する葛藤は、之をヴェルサユ講和會議以前からの來歷に繹ねばならない。

（昭和四年八月九日稿）

第十二　英米の決闘

大戰後英獨の海軍競爭

ハウス大佐は、ロイド・ジョージ氏が、海上自由―ウイルソン第十四個條中の第二個條―の主義を贊成せざるに對し、大統領ウイルソンの意を體して、左の如き露骨なる文句を吐露した。

若し大英國が、明白に海上自由の主義を承認せざるに於ては、彼等は合衆國民が、多年期待したる最強力なる海軍を、其の準備と其の資源の限りとを以て、建造する日の確實に來ることを覺悟せねばならぬ。

と。然もロイド・ジョージは、此の威嚇にも辟易しなかつた。然もハウス大佐の此の文句は、やがて事實として現れ來りつゝある。而して此の如く世界大戰後十年間、英獨の海軍競爭の代りに、英米の

何事も世界一の米國

海軍競爭の舞臺が開け來つた。

*　*　*

此の競爭を避く可く、一九二一年十一月には、華盛頓會議は開催せられ、英、米、日の間に、戰鬪艦に於ける五、五、三の比率は協定せられた。此れは英米兩國相談づくにて、日本を窘めたるものと見るものもある。されど日本は決して米國正面の相手ではない。米國は日本に對しては、事實は兎も角も、自から其の優越權を認めてゐる。但だ何事も世界第一を目途とする米國が、海軍に於て、英國の下風に就くは、頗る自から不本意にして、不快愉とする所であらう。

*　*　*

新提議の未了

戰鬪艦の協定のみにては、海軍競爭休止は、半ば以上有名無實だ。此に於て一九二七年二月米國は、日、英、佛、伊に對して、補助艦に關する新提

議をなした。然も英米兩國の確執は、遂ひに協定を見ずして未了の局を結んだ。

英國の立場と補助艦

吾人は此の問題を專門家に一任して、双方の言ひ前の是非を、今玆に論判する必要を認めない。但だ英國の立場は、其の有力なる多數の補助艦もて、其の海外の諸植民と聯絡を保ち、其の世界に於ける通商を保護し、而して更らに大英本國の生命の原たる食料輸入の途を安全ならしめ。而して一旦緩急に際せば、海上に快駛して、怪しき船舶を臨檢し、若しくは捕獲し。或は他の港灣を半部、若しくは全部封鎖する等。所謂る米國流の海上自由を、海上不自由ならしむる爲めの用具に供せんとするに外ならず。而して米國が一方英國を抑へて、自國を揚げんとする底意ある、是亦た決して疑ふ可き餘地はあるまい。

* * *

第三回目の海軍制限會議と英國

今や第三回目の海軍制限に關する會議は、亦た米國によりて提唱せられ。英國首相マクドナルド氏と、駐英米國大使ドウス氏との間には、頻りに其の內相談行はれつゝある。元來マクドナルド氏は、英國に於ける否帝國主義者の第一人にて、英獨戰爭の際さへ、非戰論を公言したる程なれば。此人が內閣の首班たるに際して、米國が此の問題を持ち出したるは、談判を纏むる上に於ては、最善の潮合と云はねばならぬ。されど如何に勞働黨の內閣なればとて、本來英國內閣なれば、英國多年の主義を、此の一時に拋却して、米國の意見に盲從す可き乎、否乎。將た米國大統領フーバア氏は、最も時務に達し、事理に通じたる政治家にして。時と場所とを論ぜず、唯だ米國第一主義のみに執著する人にもあらず。されば此の會議は、從來に比して、寧ろ有望と云はねばならぬ。若し此れにしても失敗せば、到底兩國の間に於ける海軍の競爭は、休止せらる可き見込はあるまい。

予は心から其の會議の成功を望む。されご英米の海軍競爭は、假令此の會議が成功しても、果して永久に休止するを得可き乎。予は若し其日來るあらば、そは英國が愈よ往生して、米國に叩頭する日であるご思ふ。英國の此の場合は、宛もカアセージが、羅馬に對したるが如く、所謂る力竭きて、餘儀なき運命に服從するの他なきのみ。

永久に休止の日は英國の往生

* * * * * *

英國の活力は、果して幾許存する乎、何人も之を測定することが出來ない。但だ若し其一あらば、そは英國が何時迄世界海權の第一位者たる位地を保有する乎、否乎によりてトするの外はあるまい。

英國の活力奈何

（昭和四年八月九日稿）

第十三　英米對日本の三世相

人或は日米の間柄を以て、到底太平洋海權問題では兩立せずご云ふ。されご太平洋は廣く、太平洋は大。單に日米兩國のみでなく、如何なる國が參加しても、互ひに存立し得ざる程のものではない。若し專制を云はゞ、世界何の處か、兩立し得るものあらむ。何んぞ單り太平洋のみご云はん哉。若し米國が太平洋に於て、共存同榮を以て、自から甘ぜば。日本は固より、自餘の諸國何れも米國の友邦たらむ。若し太平洋を以て、米國の領海同樣ご心得、其の私を濟さば、世界を擧げて、米國の敵たらむ。何んぞ單り日本のみご云はん哉。

太平洋海權問題と米國

* * * * * *

英米の我國に對する一正一反

人或は英國を以て、日本の常住味方となし、米國を以て、日本の常住敵となす。是れ實に大なる誤解だ。近く明治の歴史に溯りても、二十七八年以前は、米國は日本に最も親しく、英國は、事毎に支那に最厚して、日本を抑制したる氣味があつた。其の英國の日本に對する態度を一變したのは、二十七八年役にして、精確に云へば、三十三年團匪事件以後の事。而して米國の日本に對して、其の鋒鋩を露はし來りたるは、實に明治三十七八年役以後の事に過ぎない。乃ち明治の時代に於て、此の如く英米の我に於ける態度は、一正一反、一反一正した。過去此の如し、現在此の如し、將來の事、亦た以て知る可きみの。

* * *

自由無檢束の我が日本帝國

本來日本には決して固有の友もなければ、本來の敵も無い。獨佛の如く、歴史的仇怨の因緣は、未だ何れの國とも、決して結んでゐない。されば我が大日本帝國は、世界に位する國家の一として、極めて自由に、極めて無檢束に、極めて行き掛りなき立場を占めつゝあるものと云はねばならぬ。此れは日本が世界に於て、最も後れて開國したる賜物の一と云はねばならぬ。されば吾人は決して此の賜物を粗末にす可きものではない。然るを我自から我が自由なる立場を無視して、自から餘計の行き掛りを作爲し、その首枷、足枷に繫がれんとするが如きは、たゞに愚妄を表明するばかりでなく、實に自から國策を誤るものと云はねばならぬ。

* * *

自から英國の臣僕

無遠慮に云へば、英國必らずしも日本に對して、無私の友情を湛ふるものでなく。米國必らずしも日本に對して、無稽の敵意を挾むものではない。若し日本が英米兩國の海權競爭の間に介在して、恒に英國側の追隨者たるが如きあらば、是れ實に我が帝國を擧げて、英國の臣僕たらしむるものだ。

英米兩國に對する日本の長策

日本は殊更ら英國と新怨を結ぶ必要はない。然も米國に對しても、決して舊怨を挾む必要はない。要は只だ兩國に對して、我が大日本帝國は、恒に公平なる立場を占めねばならぬ。乃ち日本は其の財力に於て、將た領土に於て、若しくは百工器械に於て、兩國と相ひ比する能はざるも、儼然たる東洋の一帝國として、其の面目を保持し、其の眞相を發揮せねばならぬ。乃ち如何なる場合に於ても、兩國に對しては、白紙を以て臨まねばならぬ。此れが兩國に對して友誼を全うする所以にして、亦た我が大日本帝國に取りて、安全第一、賢明第一の長策である。

* * *

日米互ひに本來の面目を正視

吾人は米人の我に向て、移民問題に就て、今尚ほ差別待遇を做しつゝある に釋然たる能はぬ。されど此の一事の爲めに、米國の總てに對して、彼が我を敵視するものと解す可きでない。乃ち加奈太に於ては如何、濠洲に於ては如何、南阿に於ては如何。日本人は英國の諸領土に於て、米國同樣、若しくはより以上の差別待遇を受けつゝあるではない乎。吾人は移民問題のみを以て、米國を何時迄も、何處迄も、敵に廻すの、決して理解ある作用でないと思ふ。日本と米國と經濟上に於ては、最も共存同榮の國柄だ。米人の中にも、日本を敵視する短見者は少くない。されど日本を敵とするは、米國に取りても、決して長策ではない。吾人は日米の干係に就ても、今ま一膜を排して、互ひに其の本來の面目を正視せんことを望む。

（昭和四年八月十日稿）

第十四　日米の離間者

日米戰爭の噂と日本の覺悟

日米戰爭の噂は、米國側よりも、寧ろ第三者によりて、盛んに宣傳せられてゐる。されど此れは日本人としては、浮かと乘らぬ心掛が專一だ。苟も世界に國を立つる上は、他國より理由なく進攻し來るに於ては、國家の生存上、之を擊退す可きは當然の義務である。吾人は如何に喧嘩を賣り付けられても、決して之を買ふ勿れとは云はない。されど喧嘩は決して我より賣り付く可きものではない。又た決して容易に賣り付けらる可きものでもない。吾人は此の問題に就ては、三思ごころか、三百思をもせねばならぬ必要を感ずる。

* * *

米國は世界の一大脅威

米國は有體のところ世界の一大脅威だ。特に英國は勿論、歐洲列國何れも米國の橫暴を厭はないものはない。されば佛國のブリアン氏の如きは、歐洲聯邦を作りて、以て北米聯邦に對抗す可しとの意見を漏らしたる程だ。斯る意見を懷く者は、決してブリアン氏一人には限らない。

* * *

日本の指名は難有迷惑

此際若し誰しもの心中を打ち明くれば、何者か敢然起て米國の鼻先を挫ぐ者が欲しいに相違ない。而して世界は今や其のチャンピオンとして、日本を指名せんとしつゝある。否な指名しつゝある。されば世界の隨處に、日米戰爭を挑發せんとする者は少くない。今日世界の何れの國を旅行するも、將た何れの國人に接觸するも、日米戰爭の早晩來る可きを豫言せざるものは稀だ。而して日本の爲めに贔屓の口を利く者は、早き程が日本の利益であるとさへ、親切らしく語つてゐる。

日米戰爭を喜ぶ者は第三者

* * *

されど我等は浮かと此の口車に乘らぬことよ。日米戰爭は、日本の爲めにも、米國の爲めにも、決して何の利益はない。之を喜ぶものは、唯だ第三者だ。日本が米國の橫暴を制するは、固より希ふところ。米國が日本を叩き付くることも、亦た惡しからずだ。特に日米双方共に斃れざるまでも、其力疲れ氣餒ゆることは、最も驩迎す可き事だ。日本では米國のみが憎まれ兒で、日本は世界の善い兒であるかの如く自惚るゝも、其實は日本も亦た憎まれ兒の一人であることを自覺せねばならぬ。日本の失敗の爲めに、世界に涙の一滴だも流すものとては、恐らくは今日のところ見出されまい。此れは日本の不德のみではない、最近日本の勃興が、日本をして此の如き不利なる地位に立たしむることとなつたのである。

* * *

日本の國策と自國の立場

吾人は來るなきを恃まず、待つあるを恃まねばならぬ。從て我が國防に就ては、寸毫の油斷は出來ない。されど國防の準備を以て、直ちに戰爭を豫想す可き理由はない。況んや我より進んで敵意を表するが如きに於てをや。日本の國策は、他國の指示によりて定む可きでなく、自國の立場から定めねばならぬ。而して此の立場から云へば、吾人は國力を賭して、第三者の爲めに、其の偉大なる競爭者を退治するが如き役目を、輕心快腸もて、負擔するが如きことを、戒愼せねばならぬ。我が大日本帝國は、英國の番犬でもなく、米國の僕從でもない。日本は兩國に比して、其の實力に於て、若干の差違ありとするも、儼然たる東亞の一大帝國である。吾人は決して英米兩國海權競爭の渦中に投沒す可きでない。吾人は絶對的に孤立を標榜するものではない。若し必要あらば、英國と結ぶ場合もあらむ。米國と結ぶ場合もあらむ。或は英米兩國と結ぶ場合もあらむ。否な自餘の諸國とも

日米戰爭の音樂に躍る勿れ

苟も必要あらば、それに順應し、それに善處す可きは當然だ。されど先天的に日米戰爭の音樂につれて、自から躍り出すが如き狂態を演出す可きものではあるまい。而して今や世界は、斯る音樂もて充滿してゐる。吾人は此の音樂は、實に亡國の音樂であることを覺悟せねばならぬ。而して吾人は我が國民に向て警告すると同時に、北米合衆國の人々に向ても、均しく之を愼戒せんことを警告せねばならぬ。米國人中、固より日本をば、何者の日本、小癪なる日本と思ふ者もあらう。されど米國の背面を覗ふ者は、決して日本ではあるまい。繰り返して云ふ、日米戰爭は、日米兩國の兩損にして、一得なきもの。之を思ひ、又た之を思へ。

（昭和四年八月十日稿）

第十五　戰爭の歷史的經過

人間は本來戰鬪的動物

世界大戰の效果の一は、戰爭其物を一變したることだ。人間は本來戰鬪的動物だ。人の生るゝや、先づ天然と戰ひ、而して同類と戰ふ。原始的人類は、殆んど恒に戰鬪情態をもて、其の生活としてゐた。此の如くして團體をなし、部落をなし、邑となり、市となり、都となり、國となり。其の範圍の擴大する每に、戰鬪の範圍も亦從つて擴大せらるゝに至つた。

*　*　*

戰鬪の歷史は人類進化の歷史

手短に云はゞ、戰鬪の歷史は、人類進化の歷史の日錄だ。當初は極めて原始的なる戰具を使用した。やがて弓矢を用ひ、鐵材の使用と共に、利劍銳矛を作り。山地には戰馬を用ひ、平地には戰車を驅り、河海には戰船を浮

べ、而して場所によりては、虎豹犀象の如きは、戰鬪に必須の具となつた。

* * *

鐵砲の威力が戰鬪の一大分水嶺

而して火藥の發明と與に、鐵砲の使用と與に、戰術も亦た一變せざるを得ざるに至つた。我國に於て織田信長の兵が、長篠に於て、武田家の猛將勇夫を、將棋倒しに倒したるのも、畢竟鐵砲の威力を、活用したるが爲めと云はねばならぬ。此の如く火器の使用は、戰場に於ける一騎駈け、若しくは一騎打をして、殆んど無意義たらしめた。此れが戰鬪の歷史に於ける、一大分水嶺である。

* * *

世界大戰と塹壕戰鬪

然も世界大戰に至りては、更らに一大變化を來たした。最初の經驗は、塹壕戰鬪を教へた。乃ち敵も味方も、相互にもぐらの如く、土中に潛居し、其の內から一種の發銃の方法を見出し、相互に他の乘ず可き機會を覗ひつつある。此の如くして防禦は易く、進攻は難く、双方與に滿を持して、睨み合の姿を持するの他は無かつた。何となれば此の戰法によれば、數千の精兵は、塹壕內に在りて、容易に數萬の進攻軍を擊退するを得るからだ。

* * *

第二期には更に大變化

然も窮すれば通ず。やがて進攻の方法に就て、種々の功夫を凝らした。保護色を利用するの術も、殆んど妙境に達した。鐵條網、鹿柴、其他の凡有る障礙物を打破す可き手段も、それぞれ出で來つた。例せば裝甲自動車の如き、亦た其れである。更らに猛烈なる威力を持つ巨砲も出で來つた。それよりも恐ろしき毒瓦斯も出で來つた。飛行機の利用も、追々進步した。此の加くして世界大戰の第二期には、防禦のみでなく、進攻の上に、更らに大なる變化を來たした。

* * *

戰爭の慘禍極點に達す

世界大戰は、凡有る文明の知識と技術とを以て、人を殺すの方便に供した。此の如くして戰爭の慘禍は始めて其の極點に達した。然も若し更らに戰爭が一九一八年の秋に了らずして、更らに一九一九年まで持續せられん乎。最後の一年には、更らに如何なる慘劇が演出せられたる乎、未だ測り知る可らざるものがあつたであらう。

* * *

一九一九年の戰鬪と破壞力の豫想

大戰の四年間は、第五年に來る可き序幕に過ぎなかつた。一九一九年の戰鬪は、破壞力の廣大無邊なる働らきを立證せしめたであらう。若し獨逸が整々として萊茵河に退却する丈の士氣を維持し得たならば、一九一九年の夏は、振古未曾有の兵力と戰法とを以て、追擊せられたであらう。幾千の飛行機は、其の都府を燒土としたであらう。幾千萬の巨砲は、其の前衞を粉齏したであらう。毎日十哩乃至十五哩づゝ、約二十五萬の兵士が、其の一切の所用物と與に、運搬せらるゝ方法は既に出來上つてゐた。不可思議なる程兇惡なる毒瓦斯は、抵抗者を窒息せしめ、其の對抗力を、全く麻痺せしめたであらう。されど休戰の水は入れられた。而して一九一九年の略があつたであらう。固より獨逸側にも、それぞれ其の方恐怖戰栗は、兩大敵軍の文書函中に埋藏せられ了つた。（チャーチル氏著、世界大戰後日譚）

今後の戰鬪の何物を想像

是れは責任ある位置に立つたる一人の語る所にして、決して書齋的空論ではない。吾人は實に世界大戰の示したる敎訓によりて、今後の戰鬪の何物なる可き乎を想像することが出來る。

（昭和四年八月十日稿）

第十六　古の戰爭と今の戰爭

古の戰爭は概して美的

古の戰爭には詩があり、歌がある。而して又た戯曲がある。云はゞ古の戰爭は、武勇傳の陳列でなければ、英雄傳の展覽であつた。此れは必らずしも後人が戰爭を美化してのみでない。當時の戰爭其物が、固より美的であつたからだ。而して戰士も亦た其の心持ちが、概ね美的であつたからだ。

* * *

戰國時代と戰爭の物語り

源平より元龜天正の戰國時代に至る、其間に若し戰爭の物語を除却せん乎、日本の歴史は、比較的貧弱ならざるを得ない。賴山陽の日本外史の人口に膾炙したるも、畢竟其の記事が、專ら戰爭に關する詩歌的風調を帶びたるが爲めだ。一の谷合戰、屋島、壇の浦。若しくは楠氏の千早城、赤坂城の

嬰守、延いて川中島に於ける信玄、謙信の決闘、一こして吾人の美的感情を挑發せざるものは無い。降りて關ケ原、大阪冬夏兩陣、若しくは島原役に至れば、全くこは云はぬが、其の興味は半ば減殺せられた。

* * *

二十七八年役と三十七八年役

降りて明治二十七八年戰役、三十七八年戰役までは、文明の利器を當時の標準としては、最大限度に利用したるも。亦た戰爭とは、敵味方の戰士の間に行はるゝ勝負事にして、自から一切の勝負事に伴ふ所の、面白味が其中に存するものがあつた。例せば廣瀨中佐の旅順港口の閉塞船に於ける、橘中佐の遼陽方面の激戰に於ける、何れも人をして忠肝義膽の活ける典型を見るの心地あらしめた。

* * *

然も世界大戰は、戰爭其物の性質を擴大したこ云はんよりも、殆んご一變

今や國民と國民との絶對的戰爭

した。從來の戰爭は戰士と戰士とであつた。されど今後の戰爭は、國民と國民との戰爭だ。從來は唯だ敵陣を目標として攻擊した。今や國家の主惱たる都府、要地を攻擊することゝなつた。從來の戰士は專門的にして、且つ概ね職業的であつた。乃ち戰爭は其の人々の仕事にして、他の者は一切無關係であつた。されど今後に於ては、男子も、女子も、老人も、少年も、苟も一人前、若しくは半人前の人間は、悉く戰時には直接間接戰鬪に使用せらるゝことゝなつた。されば敵を破るは、其の相ひ對する戰鬪員を破るよりも、彼等を支持する背後の力を破るを先務とするに至つた。玉石俱に焚くと云ふ言葉があるが、今後の戰鬪は、武器を携帶せざる、平和的の老人、婦人、子供までも鏖にするを以て、其の尤も有效なる方法と認めてゐる。此の如くして飛行機や、毒瓦斯は、自由自在に使用せられ、人間をして遺類なからしめ、文明をして、其の痕跡を地上より滅絕せしめずんば止まざらんとす。

今日の戰爭は人類虐殺文明全滅

* * *

古は戰禍の例として、父は子を哭し、婦は夫を哭すと云うたが。今日では其子を哭するまでもなく、老父先づ自から斃れねばならず。其夫を哭するまでもなく、妻女先づ自から斃れねばならぬ必然の運命となつて來た。古より虐殺なる言葉は、事實と與に存してゐた。されど此れは戰爭に取りて、除外例であつた。されど今日の戰爭は、所謂る虐殺を以て目的としてゐる。敵の死命を制するの道は、敵兵を殺すばかりでは足らない。それよりも敵國をして人も無く、草も生ぜしめざる迄にやりつくるの外はない。而して近代的科學は、宛も注文通りに、人類鏖殺、文明全滅の方便を遺憾なく提供しつゝある。

* * *

戰爭の慘禍を極端に發露す

有體に云へば、今後の戰爭には、殆んど所謂る人間味は沒却せられる。猛將英帥が、自ら陣頭に立つて、其の堅甲、精兵を率ゐ、左右の手を動かすが如き、花々敷振舞は、今や藥にしたくも見ることは出來ない。此後は唯だ戰線より幾哩乃至幾十哩の後、密室の內に在りて、戰圖を按じ、電話若しくは無線電信を利用し、彼處に爆彈を放下せよ、此處に毒瓦斯を散布せよと命令を發し。而してマスクを著け、保護色を帶びたる兵士は、その命令通りに運動するの外はあるまい。此の如くして一朝にして幾百萬の大都は燒かれ、一夕にして幾十萬の生靈は殺さる。戰爭の慘禍も、此に至りて極まると云はねばならぬ。

（昭和四年八月十日稿）

第十七　帝國主義の三階段

立國者は皆帝國主義

凡そ國を立つるもの、何れか帝國主義者たらざる可き。我が勢力を、一寸にても、一分にても擴充せんとするは、國家としての本能である。此の本能の働らきが消磨する場合は、國家其物の衰亡期に入りたるものと覺悟せねばならぬ。彼の打破帝國主義などと囈言するは、他の帝國主義を排して、我が帝國主義を建立せんとするの方便に外ならない。

*　*　*

帝國主義と三段の階級

歷史的に觀察すれば、帝國主義の興隆には、自から三段の階級がある。第一次は武力的帝國主義、第二次は經濟的帝國主義、第三次は文化的帝國主義。然も時と場合によりては、兩者併行することもある、三者共立することも

ともある。但だ順序として云へば、上記の通りである。吾人は今ま逐一之を史的事實に就て、證明するを必要としない。そはそれ等の事實は、何人も能く之を知る所であるが故に。

＊　＊　＊

開國の歴史は武力

試みに看よ、何れの國家にせよ、其の開國の歴史は、武力が最初に顯彰せられてゐる。其の發展の歴史も、亦た同樣だ。之を子供の團體に就て觀察するも、所謂る餓鬼大將なるものは、子供の群中、其の腕力の尤も卓越したる者だ。之を原始的蠻人の團體に就て見るも、亦た同樣だ。而して國家が其の勢力を四方に擴充する手段、亦た必らず武力もて、他を征伏するを以て、最初としないものはない。

＊　＊　＊

大なる征伏

成吉斯汗は奈何。帖木兒は奈何。歴山王は奈何。該撒は奈何。奈翁は奈何。

＊　＊　＊

大なる征伏者は武力

凡そ世の大なる征伏者は、大なる武力者たらざるものは無い。羅馬帝國の如きも、其の成立の主たる原因は、羅馬の武力に是れ賴るものであつた。今日に於ても列國が武力を競ふ所以は、何れも自衞の爲めと稱するも。若し總ての國が、他國を侵す意志なくんば、總ての國が、銘々に武力の準備をなす可き必要はないではない乎。

＊　＊　＊

武力の次は經濟力

されど武力の次には、必らず經濟力が來る。否な武力其物さへも、世運の進捗に伴うて、經濟力を藉らねばならぬではない乎。世に富國强兵と云ふ、然も現代の如き武備に多大の經費を要する時節には、富國ならざれば强兵たることは出來ない。一隻の潛航艇でも、一臺の飛行機でも、最後の問題は金錢ではない乎。

＊　＊　＊

先づ里閭の小事を見よ

試みに里閭の小事に就て看よ。當初は腕力の尤も強き者が、その暴力もて、周圍の物を、勝手に他人より强奪し去つた。されどやがては經濟力もて、之を巧みに捲き上ぐることゝした。例せば地面を抵當として金を貸し、其の期限に至りて、直ちに之を沒收するが如きは、其の著明なる例である。

* * *

國家的に應用した米國の手段

此の手段を、國家的に應用したる適例は、北米合衆國を以て、其尤とせねばなるまい。吾人は今玆に事々しく其の證據を揭ぐるの煩を避くるであらう。されど若し（Dollar Diproma-cy）なる一書を繙かば、必らず餘師あらむ。此書は一九二六年（昭和元年）米國紐育に於て出版せられたるものにして、

米國の經濟的膨脹
經濟的侵入
勢力範圍
政治的調節
武力的干涉
併合を用ひずしての獲得
征伏と買收
戰債及び支拂
米國帝國的外交の進化
附錄　諸條約文

米人自ら本來の面目を闡明

以上によりて、略ぼ其の要領を得るに幾らん乎。此書は實に米國が如何なる程度迄、經濟的帝國主義の政策を行ひたる乎、將た米國の外交政策の昭著なる特色は何物なる乎を、米人自から闡明せんと試みたるものにして。之を見れば如何に經濟的帝國主義が、米國本來の面目であるかを知るに足らむ。吾人は必らずしも此の書中の所說に、悉く裏書せんとするものでは

ない。但だ其の特色として擧げたる一點に於て、首肯せざるを得ざるものがある。

（昭和四年八月十一日稿）

村落に於て、小錢を貸しつゝ、大地主となりたる實例を、大陸や、世界の大舞臺に於て、適用しつゝある者は誰ぞや。

第十八　米國と滿洲問題

米國の經濟的帝國主義活動の最も著明なる例は、三十七八年役、及び其の以後に於ける、米國の滿洲政策が、最も雄辯に之を語つてゐる。吾人はルーズヴェルト氏の日露平和に關する仲介の勞を、決して小とは思はない。而して少くとも日露戰爭の中期までは、ルーズヴェルト氏も、若干の好意を日本に表してゐたには相違あるまい。されど若し此の仲介をもて、彼の單純なる日本に對する厚意とのみ見るは、恐らくは政治家としてのルーズヴェルト氏を見縊るものであらう。彼は無我の愛を隣邦に捧げて、自國の利害を忘却するが如き、生ま緩き痴漢ではなかつた。

* * *

南滿鐵道を奪取せんとす

ルーズヴェルト氏の三十七八年戰役に於ける運動、及び其の動機等に就ては、記者は曾て「三十七八年役と外交」の小著に於て、叙述してゐる。されば今ま玆に之を繰り返すの要はあるまい。されどルーズヴェルト氏と云は ず、米國の資本家は、日本が國力を賭して得たる滿洲鐵道をば、横合より飛び出して、其の金力もて、之を乃公藥籠中の物とせんと試みたではない乎。當時日本は唯だ如何にして戰局を收拾す可き乎に、是れ汲々として、其の獲得したる殆んど唯一の獲物を、如何にす可き乎に就ては、未だ深く考慮する所なかつた。乃ち其の機會に乘じてハリマン氏は、我が元老及び當局者を舌端にて丸め込み、玆に南滿鐵道經營を、日米協同の名によりて、其實米人に一任するの條約を結ぶに至つた。而して此の危機一髮の際に、小村大使はポーツマウス條約締結の後、米國より歸朝し。ハリマン氏が、日本より米國に歸航して、未だ太平洋の向岸に達せざるに先ち。其の破談

實行に至らず止む

の電報は、彼を待ち受けしむ可く手筈が出來上つた。

*　*　*

此の一件に就ては、(Dollar Dipromacy) には、左の如く記してゐる。

日露戰爭に就ては、日本は若干ハリマン及びその銀行者クン・ローブ會社より融通を受けた。宛も當時巴奈馬運河は完成し、合衆國をして、太平洋に於ける商業上、政治上の覇權を爭ふ可き、恰當の軍略的地位を占むるを得せしめた。……ポーツマウス條約の調印せらるゝや否や、ハリマン氏は、伊藤公、桂公と與に、南滿鐵道の米日共有、及び鐵道に附屬する石炭、木材、鑛山等の讓與に關する覺書を取り極めた。ハリマン氏は南滿鐵道もて、彼の大企畫である世界一週鐵道の一部たらしめんとした。……然も此の覺書は、日本に於ける有力なる政治家等の反對の爲めに、遂ひに實行に至らずして止んだ。

東支鐵道購買の計企

* * * * *

然もハリマン及び其の銀行者たるクン・ローブ會社は、滿洲の開發に於ける彼等の企畫を拋却しなかつた。ハリマン氏は依然世界一週の鐵道の經營に執著した。彼は此れが爲めに、太平洋の不凍港に貫通する線路を必須とした。而して一九〇六年以後、露國政府に向て、東支鐵道の購買を、屢ば商議した。露國は欣然其の需めに應じた。但だ其の競爭者たる日本が、露國同樣、其の軍略上の利點を拋却し、南滿鐵道を、米國銀行者に賣却するを條件として。然も日本は之に應じなかつた。ハリマン氏は、更らにその併行線として、直隷灣頭の錦州より黑龍江の愛琿に通ずる鐵道を計企した。

* * * * *

而して更らに米國國務長官ノックスの滿洲鐵道を、列國共同管理とせんとする提唱に就ては、斯く云うてゐる。

列國共同管理の提唱

一九〇九年十一月六日、國務長官ノックスは、第一、滿洲鐵道を、列國の資金もて、支那政府の手に歸せしめ。第二、其の資金は投資者に有利なる條件を保障し。第三、投資したる列國は、鐵道の管理其他に就て、資金返償までは、それぞれ其の監督權を行使し、且つ其の特別の便宜を得せしめ。第四、米國は勿論、日本、露國も亦た、英獨と共に、此の仲間に加入することの議を提唱した。

* * * * *

此の如くして米國の銀行者は、自國國務省の援護の下に、滿洲が、日露兩國に併呑せらるゝを防止せんと試みた。されど日本は此際に於ても、亦た滿洲に於ける其の利權を拋却するを否んだ。而して露國も亦た日本が然かする間は、其の北支鐵道を拋却するを欲しなかつた。

汎亞米利加政策の進行

以上は米國側の申分だ。然も平心に考へよ、如何に自國に好都合の申分よ。此れでは米國は全く濕手で粟ではない乎。若し之をしも經濟的帝國主義の活動と云はずんば、天下豈に經濟的帝國主義の活動なるものあらん哉。滿洲には日露兩國のあるありて、遂ひに米國は思ふ樣には手を伸ばす能はなかつた。されど其の國力振はず、其の工業未進なる拉丁アメリカの諸國に對しては、容易に其の所謂る經濟的侵入なるものが行はれつゝある。此の如くして北米合衆國の所謂る汎亞米利加政策は、彌よ確實に進行せられつつある。

（昭和四年八月十一日稿）

第十九　油斷大敵

東西の歷史と文化的帝國主義

所謂る文化的帝國主義は、一方の民俗が、他方の民俗を、精神的に征服するものにして、極めて手近き例は、露國の赤化的運動が、其の最も昭著なる一と云はねばならぬ。然も是れは現代的流行ばかりではない。之を史的に考察すれば、東西の歷史に、其の類甚だ多くある。乃ち彼の宗教もて領土的侵略の先驅となすが如き、亦た其の適例の一に屬せねばならぬ。

*　*　*

秀吉と耶蘇教嚴禁の理由

武力的帝國主義は、威を以て征服するもの、經濟的帝國主義は、利を以て征服するもの、而して文化的帝國主義は、愛慕、尊尙を以て征服するもの。征服の效果は之を以て其尤とせねばならぬ。吾人は此に於て、豐臣秀吉の

耶蘇教を嚴禁したる理由の一半を說明し得ると思ふ。秀吉は決して宗教的頑冥者流ではなかつた。彼は自から或る宗派の信者として、異宗者を迫害するが如き野暮漢ではなかつた。然らば彼は何故に耶蘇教を嚴禁したる乎。秀吉は當時の耶蘇教師が、日本に於ける改宗者に對して、異常莫大なる勢力を持つてゐたるを目擊した。而して此の勢力は、取りも直さず日本に於ける別種別樣なる文化的帝國を建立する所以たるを看破した。而して此の建立は、日本の獨立國としての主權と兩立す可らざるを看破した。是れが則ち禁教の唯一ならざるまでも、其の重要なる原因であつたに相違あるまい。若し信長をして今ま十年長生せしめん乎、耶蘇教の禁斷は、秀吉にあらずして、信長でありたらんも、未だ知る可らずであらう。

* * * *

精神的に他國に轉籍

斯く云へばとて、吾人は決して當時の耶蘇教師が、日本征服の先驅者として、出掛けたと臆斷するものではない。當時の耶蘇教師中には、今日の新教各派の宣教師よりも、其の動機の寧ろ眞醇にして、其の行業の更らに精進するものがあつたであらう。吾人は實に斯く信ず可き理由がある。そは其の改宗者達の中には、とても今日の基督者の夢想し能はぬ程の聖者があつたかの如く感ぜらるゝからだ。されどそれはそれとして、其の宣教の結果は、忠良なる日本國民の扶植にあらずして、却て其の反對であつたことを否定することが出來ない。何となれば彼等の或者は改宗と同時に、精神的に他國に轉籍したるの趣きがあつたからだ。

* * * *

赤化宣教師の危險

我國に於ける文化的征服の實例は、吾人の眼前に幾許もある。彼の英學者中には、我が英國と云ふ程の心醉者があるではない乎。米國かぶれの者には、我が米國と云ふ程の心醉者があるではない乎。獨逸にかぶれ、佛蘭西

にかぶるゝ者亦た然りとす。而して特に露國にかぶるゝ者の中には、其の衆議院の選擧費さへも、赤化者流の手から受け取り、且つ受け取らんとしたるものあつたではない乎。〔此の一項は、確かなる筋より著者親しく之を聞いてゐる〕然も今日の赤化宣教師は、秀吉時代の耶蘇教師などの比ではない。彼等は單に日本を精神的に征服するを以て足れりとするものではない。彼等は歴史的日本を、根本から破壊し去らんと企てつゝある。

*　*　*

深憂大患は米國の黄金萬能主義

世界大戰後、武力的帝國主義は、姑らく其の鋒先ををさめてゐる。而して極めて鋭敏に働きつゝあるは、經濟的帝國主義と、文化的帝國主義だ。而して經濟的と云ひ、文化的と云へば、何となく上品に思はるゝも、赤裸々に云へば、一は金權を加へ、他は毒素を盛るものにして、其の害は武力的帝國主義に比して、增すあるも、決して減ずることはない。而して經濟的帝國主義の代表者は、實に米國にして、文化的帝國主義の代表者は、實に露國である。而して我が日本の如きは、實に腹背から此の二大勢力の爲めに、侵入せられんとしつゝある。寔に以て油斷大敵とは今日の場合である。然も米國の經濟的帝國主義は、思想的にも亦た我國に毒素を盛りつゝある。人皆な露國の赤化的共産主義が、日本の深憂大患であるを知りて、米國の黄金萬能主義が、更らにより以上の深憂大患であることを氣附かざるは、何故であらう。

（昭和四年八月十一日稿）

第二十　帝國主義の本家本元

支那は帝國主義の本家本元

近來打破帝國主義の張本人たる支那人は、世界に於ける帝國主義の本家本元である。若し支那の帝國主義と對比するものあらば、そは羅馬の帝國主義である。然も其の徹底的に於て、其の複雜的に於て、而して其の永續的に於て、到底羅馬の能く及ぶ所ではない。

* * *

支那の歷史と文化的帝國主義

支那人は各種の帝國主義を、其の相手次第によりて適用してゐる。或者には武力を用ひ、而して或者には文化力を用ふ。而して支那の歷史に於て最も著明なるは、其の文化的帝國主義を以て、凡有る接觸者を征服するの手際である。此れは到底他の民族の千年かゝりても、企て及ぶ所ではない。

* * *

帝國主義實行者たる支那の帝王

支那の三皇五帝は、何れも概して征服者である。黃帝軒轅氏の如きは、其尤なる一だ。而して若し眞に支那の歷史に於て、帝國主義の實行者として光るものは、漢に武帝あり、唐に太宗あり、元に世祖（忽必烈）あり、清に聖祖（康熙帝）あり。後の二者は、漢民族出身ではないが、支那の皇帝として、その舞臺に立ちたれば、之を除外す可きでもあるまい。

* * *

三刀使ひの名人

支那の帝國主義者は、三種の帝國主義を、概ね同時に利用した。乃ち一方に於ては武力もて威し、他方に於ては金力もて懷け、而して更らに其上に文化もて同化した。漢の武帝、唐の太宗の如き、實に此の兩刀使ひでなく、三刀使ひの名人と云はねばなるまい。

＊　＊　＊　＊　＊

支那と朝鮮其他

吾人は支那の帝國主義の最も周到に施行せられたる實例として、朝鮮を擧げねばならぬ。朝鮮は武力的に支那に征服せられたばかりでなく、經濟的にも征服せられた、而して更らにより多く文化的に征服せられた。然も是れ啻だに朝鮮のみではない。遲羅、安南、琉球、臺灣の如き、其の大小に論なく、皆な然りとする。而して西域諸邦の如きも、亦た然りしことは、中央亞細亞に於ける現代的探檢によりて、極めて詳細に證明せられてゐる。乃ち我國の如き、若し國民的自覺心が無かつたならば、未だ必らずしも朝鮮の二の舞をしなかつたとも測られなかつた。但だ我が大和民族は、一時的に他國の文化に心醉する弱點あるも、やがて自から覺醒するの特質あるが爲めに、幸ひにも支那の帝國主義に捲き込まれずして止んだ。然も公平に日本の歴史を讀むものは、如何に支那の帝國主義が、日本を征服せんと

＊　＊　＊　＊　＊

征服力は其の本能

試みたることの、間斷なかりしかを看取するであらう。固より是れ悉く支那人が、有意的の働きかけであつたのみであるとは云はない。然も支那人は武力的に他から征服せられつゝも、文化的に却て之を征服する底の力ある民族だ。支那人の征服力は、寧ろ其の努力と云はんよりは、其の本能と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

支那の新人達に希望

若し吾人をして忌憚なく云はしめば、支那二十四朝の歴史は、一部帝國主義の消長史と云はねばならぬ。然るに斯る歴史の持主にして、事珍らしく打破帝國主義などと高調するは、抑も何の心ぞや。若し支那民族から、帝國主義を取り去らば、剩す所果して幾許かある。吾人は支那の所謂る新人達が、今少しく自國の歴史を、正視せんことを望む。

＊　＊　＊　＊　＊

支那人の世界征服

支那人は武力に於ては、恐らくは羅馬人の敵ではあるまい。されど經濟的帝國主義者としては、羅馬人は到底支那人の脚下にも寄りつけまい。試みに南洋一帶に於ける支那人の勢力を見よ。彼等はアングロ・サキソン民族の、所謂る經濟的侵入を、アングロ・サキソン民族の繩張り內に於て、勝手に之を施行しつゝあるではない乎。人皆な支那料理が、世界を征服するを說く。然も支那人の世界を征服するもの、決して支那料理に限りたるものではあるまい。

* * *

史的に觀察し時務的に說明す

吾人は何れの帝國主義に對しても、別段之を好むでもなく、之を惡むでもない。唯だ之を人間集團の本能の發揮として、之を認むるばかりである。然も既に之を認むれば、之に對して善處するの道をも亦た講ず可き必要がある。吾人は其の必要に應ず可く、甚だ一掃的であるに拘らず、之を史的に觀察し、之を時務的に說明した。

（昭和四年八月十一日稿）

曠古第成千覺夢。　中原都入一枰棋。
唐虞玉帛烟花紫。　湯武干戈草色萋。

第二十一　無保障の平和

大戰後軍備は寧ろ增大

世界大戰の結果、勝者も敗者も中立者も、何れも戰爭の慘禍に目醒め來つた。然も彼等は毫も軍備を全廢せざるのみならず、減少することさへも、容易に敢てせざるは何故であらう。海軍は姑らく措き、陸軍さへも、寧ろ增加するも、減少するの傾向は無い。英國元帥サー・ウイリアム・ロバートソンの語る所によれば、英國に於ても、一個年に軍事費として、一億一千六百萬磅―約十一億六千萬圓―卽ち大戰以前に比して、殆んど倍額を支出してゐると云ふ。大戰以後は、貨幣の價格頗る下落したれば、此をも考慮す可きは勿論なれども、然も一般の傾向は、上記の數字もて卜す可きであらう。特に米國などは、全國皆兵の主義を徹底的に遂行し、女性さへも兵式操練を事とする有樣にて、兵氣銷爲日月光などの光景は、實に思ひも寄らぬ。

* * *

日英米の國防消費額

試みに大戰以後、日、英、米三國の國防に消費したる額を見るに、米國は一百二十億圓、英國亦た殆んど同額にして、我が日本は實に約五十億圓を消費してゐる。而して最近に於ける三國の軍事費の年額は、米國十六億零六百萬圓、英國十一億二千六百十萬圓、我が日本は四億八千六百八十一萬八千圓である。當年度は日英兩國は例年よりも減額し、米國は海軍擴張の爲めに、增額してゐる。されど之を見ても、軍備全廢などは、とても之を十萬億土の外に求むる外はあるまい。

* * *

嫌や〳〵な

米國は兎も角も、自餘の諸國、一として租稅の過重に苦しまないものはな

い。而して租稅過重の原因は、主として軍事費にありとすれば、何人も軍事費削減を希望しないものはない。されど何國も自から進んで之を敢てするものはない。そは我一たび削減すれば、他は乍ち其の虛隙に乘ずるの虞れあるが爲めだ。今日のところ、武力的帝國主義を、眞甲に翳して、世界に臨まんとするは。所謂る世界の暴君と稱せられたる北米合衆國にさへも、之を見出さぬ程なれば、他にある可き筈はない。されど戰爭の慘禍は、戰爭の休止を教訓するより以上に、國防の忽にす可らざるを教訓した。而して互ひに國防を競爭するの結果は、取りも直さず、武力の競爭となる。此の如くして列國何れも內心は嫌やノ〳〵ながら、借金を質に措くまでの工夫をして、尙ほ軍事の整備に汲々としてゐる。

がら軍事の整備に汲々

* * *

世界の不安去りやらず

吾人は今日の平和論が、決して不眞面目とは思はない。之を唱道する者は、何れも眞劍に相違ない。されど如何に世界の平和を保障する乎の一點に就ては、歐洲にはロカルノ條約あり、太平洋には四國條約あり。其他壽府には國際聯盟の本部もあれば、海牙には國際裁判の法廷もあり。平和の爲めには、隨分工面も爲し、工夫も凝らしつゝあれども。世界の不安は、未だ一日たりとも一掃し去りたりと云ふ場合には到達しない。

* * *

第三インターナショナルの勢力

或は第三インターナショナルの勢力もて、世界何れの國の勞働者も、悉く非戰主義を遵奉せしめ。いざ開戰とならんとする際には、世界の勞働者を擧げて、非戰主義を高調し、之を防止す可しとの說をなすものあれども、果して其の目的を達し得可き乎、否乎。世界大戰に際して、獨逸の社會主義者は、殆んど擧げて祖國の爲めに戰うた。吾人は第三インターナショナルが、果して列國の國民主義を撲滅し得可き乎、否乎を疑ふ。而して假り

に第三インターナショナルが、世界の大勢を制し得る場合に達したりとするも、彼等は武力もて其の反對者を壓倒せんことを忘却す可きでない。吾人は露國赤化國が、其の赤化主義擴張の爲めには、凡有る手段を擇まざるを見て、世界平和の守護神として、第三インターナショナルを尊崇することが出來ない。若し吾人をして率直に語らしめん乎、是れ所謂る暴を以て暴に代ふるものにあらざるなき乎。吾人は世界の平和は、朝夕を保たずとは斷言しない。されど一髪千鈞を繋ぐの危險であることを憂慮する。

（昭和四年八月十二日稿）

暴を以て暴に代ふ

第二十二　不戰條約に關する樂觀的考察

悲觀者が平和の主唱者

世界平和の進捗に付ては、樂觀者と悲觀者とがある。而して其の悲觀者が、最も世界平和の主唱者であり、且つ熱望者であることも、亦た注意す可き事であらう。英國文士ウェルス氏の如きが、其の標本だ。

* * *

樂觀者は現英國首相

吾人は樂觀者として、先づ現英國首相マクドナルド氏を擧げねばならぬ。彼は一九二八年八月巴里に於て調印せられたる不戰條約に、最も重きを置いてゐる。而して此の條約は取りも直さず、英米の間に蟠りつゝある海洋自由問題を、一掃し去つたと斷言してゐる。

列國間相互の平和に關する信用は、從來頗る稀薄であつた。されば國際

次期戰爭の準備と英國

的細故は、之を仲裁々判に附するを承引するも、苟も國家の大事に關し、私戰の問題に繫るものは、何れも之を保留しないものはない。而して列國何れも次期の戰爭の準備に是れ汲々としてゐた。されば英國の如きも、港灣封鎖、中立國船舶の捜索、海上輸送の牽掣を以て、其の自衞に必須と認め、此の一點に於ては、ウイルソン氏が海洋自由の問題を提唱したるも、斷々乎として讓らなかつた。而してハウス氏はウイルソンの意を承けて、若し此の問題に於て、英國が讓歩せずんば、米國は英國に對抗する大海軍を建造するの外なしと言明したるも、英國は依然動かず、此の如くして今日に至る迄、兩國間の海軍競爭は出で來つた。

* * *

諸權の拋却は攻擊力の薄弱

惟ふに海洋自由に就て、吾人が合衆國と一致することが、英米の完全具足せる友誼の根柢であらねばならぬ。然も如上の諸權を拋却することは、英國に取りて、次期の戰爭に際し、我が攻擊力を薄弱ならしむる所以であらう。然も從前に比して、更らに雄大なる入場者がある。乃ち商業的飛行機の發展、及び潛航艇の使用は、海上權者に向つて世界の局面を一變し、彼等が敵の糧道を絶ちて、其の勝利を得るの機會を失はしめた。されば吾人は從前の戰法に執著して、之を新たなる局面に用ひんとすることは出來ぬであらう。

* * *

不戰條約と英米の障碍消失

不戰條約の指示する所によれば、封鎖もて敵を困しむるは、所謂る私戰（Private War）にして、私戰は不戰條約に於て、非法として禁じてある。蓋し不戰條約は、交戰國に對して、中立國の權利を最も尊重してゐる。されば海洋自由問題に就て、英米の間に蟠りたる障碍は、此の條約の施行と同時に、烟散霧消したるものと云はねばならぬ。

＊　＊　＊

一家言に過ぎず

此の如くマクドナルド氏は論じ、而して英米兩國が、海軍問題に就ては、互ひに協調するの時節到來したるものと看做してゐる。而して英米既に一致すれば、世界の平和は期せずして竣つ可きものと臆定してゐる。されど此れは彼が一家言である。今や彼は勞働黨内閣の首相として、責任の位置を占めてゐる。彼は果して一個の理想的不戰條約の爲めに、英國の傳統的政策を、拋却するを得可き乎、否乎。如何に勞働黨の内閣でも、その内閣は、英國の内閣だ。英國の内閣としては、英國の國民的志望を無視する譯には參らない。吾人は彼と米國大統領フーヴァー氏との間に、果して英米間に於ける多年の葛藤を一掃し得可き乎、否乎に就て、多大の注意もて、其の成行を觀察しつゝある。蓋し若し英米兩國間に於て、從來の暗雲を排し去り、晴れ〴〵しき親類關係を恢復し得る者ありとせば、天下恐らくは此

多大の注意もて成行を觀察

の兩人に若くものはあるまい。何となれば彼等兩人は、銘々の立場に於て、何れも中心より之を希望してゐるからだ。されど米國大統領フーヴァー氏の如きは、今日既に自國に於ける大海軍派から自國を賣るものとして、攻撃せられつゝあるではない乎。マクドナルド氏の如きも、愈よ實用の曉には、或は背後から攻撃を受くることを覺悟せねばなるまい。されば吾人はマクドナルド氏が、在野に於ける言說を、唯一の證據として、將來に於ける英米の海軍問題に關する合致を保證するは、恐らくは大早計であらう。

（昭和四年八月十二日稿）

英米の海軍協定は、二十個條中、剩す所三個條に過ぎずとは、マクドナルド氏の贈言する所、今後の成行は、果して奈何。

九月九日　著者

第二十三　不戰條約に關する悲觀的考察

戰爭に驅遣せらるゝの危險

ウェルス (H. G. Wells) 氏は、一九二九年四月獨逸議會に於て、獨逸外務省の官吏、列國外交官、其他多數の聽衆に對して、「戰爭に驅遣せらるゝの危險」と題し、左記の講演をなした。

即今平和の慾望を說くもの、世界に普ねし。されど其の實效なきは、飢餓に付て心思を勞するも、榮養に於て何の所得なきと一般のみ。惟ふに世の所謂る平和談は、平和の大敵たる甚だ驚恐す可く、最も根本的なる一義を回避し、瞞化しつゝある。そは則ち列國の主權的獨立對峙である。

* * *

一擊を試む

彼は此の如く大膽に、勇敢に、世界戰爭の主因に向て、其の一擊を試みた。

彼はマクドナルド氏と相ひ反して、所謂るケルログ盟約―不戰條約―に就て、何等の信憑を措かなかつた。

* * *

畢竟一片の空論

苟も上記の根本問題に觸れずして、千百の平和策も、畢竟一片の空論に過ぎない。乃ち昨年（一九二八年）列國間に調印せられたるケルログ盟約―不戰條約―の如き、實に此の中心的難題より迂回して、出來上りたる一の標本的適例と云はねばならぬ。抑も此の盟約たるや、北米合衆國市民等が、彼等の現に享有する日常の生活に、寸毫も影響せずして、世界の大事件に關し、彼等の良心の呵責より免れんが爲めに、工夫したるものだ。此の條約によりて、戰爭は世界に於て、不法として認められるゝのみならず、亦た禁斷せらるゝものとして、吾人に確保せられた。

爲得て痛快

此の如く此の條約は、米國が一切の現狀のまゝにて、世界に戰爭を禁斷す

る功德を行うたるものとして、自から居ることを語りてゐる。即ち慾、惡煩惱を抱へながら、極樂に往生するの類だ。米人を罵り得て、痛快と云はねばならぬ。

* * *

不戰條約の工夫者

然も果してそれが當てになる乎、否乎、それを驗するには、盟約以前即ち一九二八年に於ける列國の軍事費と、以後即ち一九二九年に於ける軍事費とを對照比較するに若くはなし。これは單に此の盟約に就て云ふのみではない。凡有る世界平和に關する條約、協商の類に對する、眞實の索引だ。要するにケルログ平和盟約―不戰條約―なるものは、總て世界平和の觀念が、完全に、不可侵の獨立せる主權の理想によりて支配せられたる人々によりて、工夫せられたるものである。

不偵半文錢

彼は此の如く此の不戰條約を、世界平和の保障としては、半文錢にも値ひせざるもの、如く駁倒してゐる。

* * *

ウェルスの主張

ウェルスは、斯る條約よりも、今少し具體的に、世界を擧げて一大關稅同盟をなし、例せば桑港から紐育を往來するが如く、總ての世界の市民をして、自國を旅行するもの、如くあらしめ。其他金融、銀行、貨幣の統一、海陸運輸の協定など行はれなば、世界が恒久的平和に向て、半途を進みたるものと云ふ可きであらうと語りてゐる。彼は曰く、今日に於て、世界平和の大敵は、國民的精神だ。國民的精神を長養するは、何れも國民的色彩を帶びたる歷史の教育による。されば今後は主として社會の進化の歷史、現代に至る人間社會の成長や、若しくは人間が凡有る力を征服して、其の自由を獲得したる說話に就て教へねばならぬと。而して彼は又た曰く、

國民的精神は、全世界から、一切惡魔除同樣、拂ひ除かねばならぬ。

と。彼は本來小說家であれば、其の所說は、唯だ無責任なる放言であるとも云ふ可きでない。彼の所說亦た實に一面の眞理なしとせない。吾人は彼れが指摘したる程に、不戰條約を蔑視せざるも、亦たマクドナルド氏の說の如く、此の條約を金科玉條視するものでもない。吾人をして云はしむれば、如何なる物も有は無に優ると云ふに止まる。

（昭和四年八月十二日稿）

亦た一面の眞理あり

第二十四　ウェルス氏の戰爭防止策

最後の斷言

吾人は尙ほウェルス氏の講演に就て、記載す可きものがある。彼は最後に斷言して曰く、

世界は戰爭に向つて進行

凡有る平和的盟約や、規約に拘らず、世界は新たなる戰爭に向て、明白に步一步づゝ進みつゝある。英國及び自餘諸政府の頑冥不靈なる、露國を驅遣して、一九一七年に顚覆せられたる舊時の國民精神的帝國主義の舊習に、復歸せしめつゝある。而して露國は孤立ではあるが、重ねて自己中心的帝國主義の地となる可く餘儀なくせられた。而して露國と、西洋諸國との間に、亞細亞に於ける無益にして骨の折れる大なる爭ひは、今や準備せられつゝある。露西亞は、之を以て西洋の帝國主義に對する反

抗と云ふ。然も其實は露西亞彼自身の精神的、物質的の優越に向ての、西歐諸國に對する競爭と云はねばならぬ。

* * *

而してウェルス氏は其の結論として曰く、

信仰療法は最早澤山

我等は一切の妄想を打破せねばならぬ。而して當面の問題を、正視せねばならぬ。大なる外科醫は、大なる手術を施すを避けない。世界大戰後十個年の信仰療法は、最早澤山である。今日は世界の平和に向て、眞面目の仕事を開始す可き時節到來した。

* * *

敢て反問す

彼が不戰條約、ロカルノ條約、太平洋四國條約其他を以て、信仰療法と一括的に冷稱したるは、頗る痛快と云はねばならぬ。但だ彼の所謂る世界列國の對峙を一掃して、世界を打つて一丸となすの策は、果して今日に實行し得可き乎、否乎。吾人は之を彼に反問せねばならぬ。吾人は此の機會に於ててウェルス氏が、英米戰爭に關しての所說を紹介せねばならぬ。

英米兩國の戰爭と日本

英米海軍競爭の禍因を爲すは、畢竟兩國の頑冥なる專門家を罪せねばならぬ。それよりも此等の頑冥者流に引きづらるゝ兩國政府の當局を、最も咎む可きである。英米兩國の戰爭が、近く實現す可き乎、否乎は、兩國海軍偏狂者共の思慮に上る所ではない。彼等は唯だ英國をして、米國の攻擊から安全ならしめんとし、米國をして英國の攻擊から安全ならしめんとし。而して一旦兵端を啓く際には、日本を何れも銘々の味方と成し得可き乎の如くに妄想してゐるのみだ。而して兩國の君子的競爭は、今や一轉して軍備擴張と、戰鬪的準備とを、實戰的極點まで騰げ來らんとす。而して兩國間の大工業者、石油操縱者の競爭は、愈よ此の喧嘩の色上げを做しつゝある。（一九二七年十月、London Sunday Express）

* * *

此れは一昨年の十月に出で來りたるものなれども、前記の本年（昭和四年）四月のものと、其の主張に就ても何等の差別はない。彼は更らに次期の大戰を豫防する方便として、斯く云うてゐる。

大戰豫防の方便

今後の大戰の接觸に向て、最も有效なる抵抗は、出來る限り多數の人々によりて、正々堂々、戰爭には一切頓著しないことを明白に決心する事である。戰爭には、決して兵士として參加せざることを明白に決心する事である。戰爭の爲めには、何等の勞作に服せぬことを明白に決心する事である。而して其の戰爭の如何なる戰爭であるに拘らず、戰爭の爲めには、一切納稅しないことを明白に決心する事である。

果して實行し得べきや

* * *

此れも或は一種の方法であらう。されど吾人は是亦た果して卽今實行せられ得可き乎、否乎に就て、ウェルス氏に反問せねばならぬ。今日國家が存在し、各人が國籍を保有する限りは、斯る行動は、到底容恕せらる可きではあるまい。苟も之を行はんとすれば、國家の罪人となり、逆賊となるの外はあるまい。

國民的精神一掃は絕對に不可行

* * *

吾人はウェルス氏の世界平和に關する意見を紹介した。然も是れ決して彼の意見に悉く贊同したのではない。否な彼が國民的精神を一掃せずんば、世界より戰爭を一掃することは出來ぬと云ふは、彼としては論理的一貫の見識かも知れない。されど吾人は既に世界あれば國家あり、國家あれば國民的精神あり。之を一掃して、世界の戰爭を根絕せんとするは、猶ほ人間の痴情は、男女の兩性あるが爲めだ。痴情を一掃せんには、先づ男女の差別を一掃せねばならぬと云ふと、殆んど同一揆とせねばならぬ。是れ所謂

不可行の論のみ。所謂る机上の空論とは此の事であらう。

（昭和四年八月十二日稿）

國民的精神は、小にしては家族愛、中にしては世界愛、大にしては人類愛に及ぼすことを得る。

第二十五　元龜天正も亦た金の世の中

現代は黃金萬能時代

世故を閲歴すればする程、富の勢力の偉大なるに驚かざるを得ない。歴史を讀めば讀む程、富の萬能力を肯定せざるを得ない。而して現代は實に言葉通りの黃金時代だ。黃金時代とは、黃金をもて、人間萬事を解決し去るからだ。

*　*　*

戰國時代と富の力

我國の歴史を讀む者は、室町氏の末期より元龜天正の間、戰國時代に於ける英雄の興亡消長に就て、其の要素を、第一武勇に歸し、第二武略に歸す。是れ固より其通りだ。されど必らずしも其の以上と云はざるも、其の以外に金錢の力あるを、忘却す可らず。金錢の力は、廣く云へば富の力は、現

代程にあらずとするも、尙ほ當時に於て、一大勢力であつた。されば當時の成功者たる毛利元就、北條早雲の如き、何れも其方には拔目なき人々であつた。武田信玄、上杉謙信の如きは、其の人々が餘りに武勇、若しくは武略の方面のみ世に譽れ高く、その爲めに經濟方面に於ける彼等の伎倆と、施爲とは、看過せられたれども。彼等兩人は、其の軍事上に於て、銘々特色を發揮したるが如く、富の生産、及び其の蓄積に付ても、亦た同樣であつた。謙信の越後上布に於ける、信玄の甲斐の金鑛に於ける如きは、才かに其の一端に過ぎない。

織田信長と錢の勘定

* * *

若し夫れ織田信長、豐臣秀吉、德川家康に至りては、何れも此の方面には非凡なる手腕の持主であつた。信長は極めて鄙吝の大將であつた。燒栗を他に與ふるさへも、三個を減じて二個とした程であつた。されど彼が武田勢に對する、第一線の防禦力として、德川勢を利用するや、彼は德川に贈るに、馬に駄し能はざる程の黃金の二大革囊を以てした。而して彼は錢の勘定には中々綿密であつた。

豐臣秀吉と黃金の蓄積

* * *

秀吉に至りては、世人唯だ彼が洪水の如く、黃金を蒔き散らしたる豪快の跡のみを見て、彼が如何にして其の黃金を聚積したるかに氣付かざるもの多し。されど彼れ秀吉は此の方面に於ける天才であつた。若し彼をして米國にあらしめば、ヴァンダーフィルドや、ロックフェラーや、カーネギーの如きは、恐らくは彼の靴の紐を解くにも足るまい。彼は極めて金錢を有效に使用した。彼が花々しく、派出やかに金錢を蒔き散らしたるは、それだけの效能、若しくはそれ以上の效能を、計較して後の事であつた。後人が彼に就て「黃金作瓦亦非奢」と詠じたるは、殊なりたる意味に於て、肯

定す可きであらう。

* * *

德川家康と金錢の利用

德川家康に到りては、鄙吝は信長に讓らず、而して金錢を利用するに於ては、秀吉と異曲同巧であつた。蓋し家康の手によりて、日本の鑛山事業は、最も大袈裟に行はれ來つた。海外貿易に最も著眼したのも、亦た家康其人であつた。而して彼は秀吉の天下に於ける、秀吉に次ぐ第一人者として、能く雌伏を甘んじつゝ、徐ろに其力を養ひつゝあつた。而して其力の一半は、實に富の生產と其の分配とであつた。彼は其富を以て、朝廷にも內密に奉仕した。而して彼は其富を以て、內密に凡有る武將を救濟し、若しくは援助した。

* * *

細川忠興の借金と家康

細川忠興が、秀次に借金し、秀次が秀吉の不興を被りて、沒落せんとするに際し。此れが爲めに忠興も亦た其の渦中に投ぜられんとするや。此の九死一生の極所をば、忠興の臣松井康之が、家康の臣本多正信によりて、家康の手許金から救ひ出されたる記事は、新井白石の藩翰譜中の、尤も光彩ある文字の一として、誰しも愛誦したるところであらう。而して此の家康の內密の救濟が、やがて關ケ原役に於ける忠興父子夫妻が、相ひ率ゐて、家康の爲めに其力を竭し、其身を竭したる所以と見るも、若しくは所以の重なる一と見るも、決して間違はあるまい。

* * *

前田利家の強點は債權

家康に次いで、當時の諸將中、最も有力者は、前田利家であつた。利家の武勇は、前田犬千代時代から、世に喧傳せられたるところ。然も彼は武勇に加へて、大人の襟度あり、能く將に將たるの德量を有してゐる。然も之に加へて、彼の強點は、彼が經濟の道に明かであつたことだ。彼は恒に算

盤を、其の座右に置くことを忘れなかつた。彼は諸將に對して、債權者であつた。その證據は、彼が死に際し、遺命して、其の券狀を燒かしめたることをもて知る可きであらう。伊達政宗の如きも、亦た彼に對する債務者の一人であつた。然るが故に政宗は利家に對しては、頭が上らなかつたものと見る者さへある。

（昭和四年八月十三日稿）

元龜天正時代も、亦た金が物云ふ世の中であつた。

第二十六　黃金萬能力の支那

若し世界に富を尤も理解し、且つ利用することを知る者あらば、そは支那人と米國人とであらう。而して支那二十四史は、實に凡有る方面に於ける黃金威力の活躍史である。所謂る黃金の萬能力は、支那の歷史が、雄辯に之を說明してゐる。支那にも項羽とか、樊噲とか、呂布とか、關羽とか、張飛とか、個人的の勇士は少くない。されど支那人を總體的に一括して考察すれば、彼等は決して武勇を以て勝りたる民族ではない。然もその代りに、彼等は武勇を制するの術と道とを解してゐる。そは富を以て、武勇を制することである。

*　*　*　*　*

項羽と漢の高祖

項羽は其の最後に於て、自己が七十餘戰を經て、常勝軍の大將でありつゝ、最後に垓下の重圍に陷りたるを見て、是れ天の我を亡すのである、決して戰の罪でないと負惜みを云うてゐる。然も彼は徒らに戰爭が武勇と武勇との交鬪であるを知つて、戰爭が復た武力と金力との交鬪であるを知らなかつたらしい。漢の高祖は、戰爭にかけては、項羽の目から見れば、弱蟲であつたかも知れないが、然も漢民族に固有なる富の力を解し、且つ此力を以て武力を制する道を解してゐた。乃ち後人の詩に、

只直黃金四萬斤

可憐堂堂漢天下。只直黃金四萬斤。

の句がある通り、漢の高祖は、陳平に黃金四萬斤を與へ、其の出入を問はず、以て楚の君臣を離間せしめた。卽ち現代の言葉で云へば、高祖は黃金四萬斤の機密費を投じて、以て天下を獲得したのだ。

* * *

胡漢の爭鬪は武力と富との掛引

支那の歷史の一面は、胡と漢とこの爭鬪史だ。胡とは概して塞外の諸民族を云ふ。匈奴も、契丹も、蒙古も、女眞も、滿洲も、皆な胡である。而して此の胡漢爭鬪史は、亦た其の反面に於て、武力と富との掛引史である。詳に云へば文明的であると共に概して文弱的の漢民族は、武勇にして强健なる胡に凡有る賄賂をした。美女も其の一であつた。されど其の重なるは、金繒であつた。卽ち支那の黃金、及び支那の絹織物の類であつた。吾人は美人を姑らく除外して、其他の一切を富と總稱するも、不可なしと認むる。而して此の富の力は、能く幾十百年の久しきに亘りて、胡の南下を防止する效能を持つてゐた。

* * *

武力に加味する富の力

されど支那人は必らずしも絕對的に武勇を用ひないことも無かつた。例せば漢の武帝、唐の太宗の如きは、塞外の驕胡を征伐し、其の領土を擴大な

らしめ。而して其の正朔を、四隅の民族に奉ぜしむるに至つた。されど斯る場合に於ても、彼等は右の頰を打つて、左の頰に接吻するが如きことを忘れなかつた。その接吻と云ふは、唯だ言葉のみの愛相ではなかつた。皆なそれ〴〵の賄賂を與へたのだ。若し此る場合、賄賂と云ふが妥當でなかつたならば、恩賜と云ふも妨げない。されど何れにしても、武力を用ふる場合にさへも、決して單獨なる武力のみを以て滿足しなかつた。それに加味するには富の力を以てした。

＊　＊　＊

最近支那の爭亂と黃金力愈〻增大

最近約二十年間、支那には殆んど爭亂寧日なしと云ふも過言でない。而して其の落著は、決して兩軍の戮戰の結果ではない。彼等が戰鬪を開始するや、相ひ對峙して、曠日彌久、殆んど何等活動する所がない。而して其の中に裏面より手を廻はして、買收運動が行はるゝ。漢の高祖が、黥布や、彭越を手に入れたのも、亦た此の買收運動の賜物だ。而して此の手段は、今日に至りて愈〻巧妙となり、老練となつて來た。されば支那では天下を得る者は、概して强者であるが、其强は武勇の强者よりも、富の强者である。

富の强者

極めて露骨に云へば、草莽の一匹夫でも、天下無二の金持ささへなれば、天下を取ることは、決して不可能ではない。固より此れも唯だ金さへ持つてゐれば、智惠も、才覺も入用ではないことは云はない。されど金持となるには、概して智惠と才覺とが、相ひ伴ふものと前提せねばならぬ。

（昭和四年八月十三日稿）

第二十七　政治と金錢

世界優秀の喰金人種

若し政治と金錢との親密なる關係を知らんと欲せば、支那の歷史に向て、其の實物教育を受くるに若くはなし。支那では役人になるにも、多少の金は入用だが、それよりも、役人となりてからの仕事は、唯だ凡有る方便も て、私腹を肥すことに外ならない。固より支那にも清廉なる政治家もある。清貧を甘んずる學者もある。寧ろ貧乏を以て、其の誇りとする所謂る高士の類もある。されど概說すれば彼等は最も世界に秀でたる喰金人種である。

* *

黄金使用に成功標本の呂不韋

支那に於て金持が、其富を政治的に使用して、最も成功したる一人は、呂不韋に若くはなし。此れは司馬遷の呂不韋列傳に、極めて明瞭に語りてあ

る。呂不韋は、秦から人質として趙に來りゐたる秦王の庶子中、最も秦廷に閑却せられたる楚を見て、奇貨措く可しとなして、彼と交驩し。彼の名によりて秦に入りて、秦王の寵妃華陽夫人に賄ひ、夫人によりて、彼は遂ひに秦の皇太子となつた。而して呂不韋は其の孕める寵妾を、彼に與へ、やがて其の子が生れた。彼はやがて秦王の位に卽いた。是れが莊襄王である。而して呂不韋の子は、自然に其の皇太子となつた。此れが秦の始皇帝である。

智惠才覺に伴ふ資本

* *

以上の話は、餘りに面白く出來上りて、殆んど小說めきてゐる。されば事實は小說よりも奇なりとは、蓋し是等の事を云ふものであらう。呂不韋は決して單純の金持ではない。彼は頗る山氣のある男にて、實は一山張りて、大當りに當つたのだ。されど斯る山を張るには相當の身元金が必要だ。吾人が金持ばかりではいけない。智惠と才覺との伴隨が大切だと云うたのは、

則ち此れが爲めだ。然も智惠や、才覺ばかりでもいけない、必らずそれを行ふ資本が必要だ。資本とは云ふまでもなく富である。

* * *

孔子さへも罕に利を謂ふ

此の如く金錢が、人間社會に於て、唯一と云はざるも、第一の有力者であることは、支那人は先天的に能く之を知りてゐる。論語には子罕に利を謂ふことあるが、孔子さへも罕には利を謂ふと特筆せられたれば、孔子でなき一般人は常に利を謂ふものたるは、說明するまでもあるまい。支那人の魯褒が、錢神論を著はしたのも、蓋し理りありと云はねばならぬ。

* * *

凡有る權勢は金力の下に集まる

支那人が金錢に對する執著力の異常なるは、徒らに金錢の爲めに金錢を愛好するばかりではない。支那人の理想は、腰に十萬貫を纏ひ、鶴に騎りて楊州に降らんとのことと聞く。此れは恐らくは肉欲方面のみの支那人を描きたるものにて、權勢慾の支那人を閑却したるものであらう。支那に於ては凡有る權勢は、金力の下に集る。而して凡有る金力も、亦た權勢の下に集る。されば一たび風雲の志を得たるものが、其の刹那に於ける權勢を利用して、否な惡用して、其の金力を集むるに汲々たるも、亦た決して不思議はあるまい。此の如くして政治と金錢とは、宛も魚と水との如く、雲と龍との如く、恒に相ひ伴隨して、相ひ離れない。

* * *

官吏の收賄は公然承認

されば清朝の時には、常俸以外に別に養廉銀とて、特別の手當さへ賜はりて、官吏の贓罪を豫防したが。大勢の趨くところは、斯る手溫るき方法にて救ふ可きではなかつた。官吏の收賄は、宛も官吏の役得として、公然承認せられ。取る者も、贈る者も、將た之を監視する者も、何れも之を相當の事として、之を異しむ者はなかつた。但だ其中にて、偶ま罪せられたる

ものは、餘りに目にあまるものあるが爲めにして、然も概して贓罪は、他の罪惡の檢擧に於ける餘罪たるものが多かつた。支那にて苟も贓罪の名を負はんには、餘程收賄術の達人でなければ能はなかつた。

* * *

地獄の沙汰も金次第

諺に地獄の沙汰も金次第と云ふ。若し此れが文字通りに實行せられたる國あらば、そは支那を以て、其の理想に幾き標本國とせねばなるまい。但だ支那人は亦た名を爭ふものは朝に於てし、利を爭ふものは市に於てすると云ひ。列士は名に狥へ、貪夫は財に狥ふなどの名言を打出してゐる。然も言行一致は、決して支那の强點ではない。

（昭和四年八月十三日稿）

第二十八　米國と英國との位地顚倒

米國の萬年的好景氣

北米合衆國が、世界第一の大成金國であり、且つ世界唯一の大富國である ことは、今玆に說明するだけが野暮であらう。米國には不景氣なし。假令 偶ま內輪に心配ありても、表向きそれを口にしない。況んや不景氣を唱つ が如きは、固より有り得可き筈がない。米人に此の景氣は、何時迄續く可き乎などと質問するは、殆んど罪惡視せらるゝ。羅馬詩人の所謂る「彼等は能くす、何となれば之を能くすと思ふからに」の詩句は、正しく米人の事業界に於ける、一子相傳の哲學と云はねばならぬ。

* * *

米國富力の激進

米國の富が幾許ある乎。今ま一九二七年十一月紐育「ウォルド」新聞の所報

に徴すれば、一九二六年（昭和元年）其富五千億弗、一人前の所得二千二百弗。云ふ迄もなく一弗は我が約二圓であれば、吾人が正當なる計數の觀念を得るには、上記に二を乘ぜねばならぬ。而して其の富が如何に激進しつつある乎は、一九二一年度には、國民の所得總額は六百二十億弗であつたが、一九二六年に於ては、八百九十六億八千二百萬弗となつた。卽ち四割三分の增加である。此れは決して物價騰貴の爲めではない。一九二六年は、一九二一年に比して、物價は寧ろ下落したからだ。

＊　＊　＊

當然たる大富國の要素と組織

米國の斯く世界の大富國となりたるは、必ずしも其の天然の資源に豐かなるが爲めばかりではない。又た世界大戰の際に、奇利を博したるが爲めばかりではない。米國は實に富まねばならぬ、國民的素養を持してゐる。富む可き社會的組織を持してゐる。吾人は決して之を以て一種の僥倖視す可きではない。如何に割引しても、此れは項天立地、米人の世界に誇る可き努力の賜物であることを、識認せねばなるまい。

＊　＊　＊

英國勞資協調破談の結果

吾人は此の米國の躍進情態と對照して、英國の現狀を察し、轉た兩國の間に、昨是今非の痕歷然たるを看過することが出來ぬ。英國は勞資間の協調破れ、其の工業も不振に陷り、從つて運輸業も、金融業も、之に隨伴して、遂ひに國家總體的に不振に陷りつゝある。今ま議院に報告せられたる所によれば、一九一三年一月から、一九二六年三月まで、失業者救濟の爲めに、消費せられたる金額、實に二億四千萬磅、卽ち約二十四億圓に上ると云ふ。而して現在でも百二十萬人乃至百五十萬人の失業者は、道路に彷徨してゐる。之を以て唯一の勞資交鬪の結果に歸するは、大早計なる可きも、此れが重なる原因であることは、決して疑ふの餘地はあるまい。

米國の新聞記者フランク・プラチー（Frank Plachy）氏は、其著「英國經濟狀態」に於て論じて曰く、

缺點は人事

英國の資源は、英人自身の考へてゐるよりも、廣大であり、無限である。唯だ之を利用するに於て、其道を誤つてゐる。卽ち其の缺點は天然でなく人事である。而して其の人事とは、勞働者と、資本家との間に、共存同榮の精神が、未だ互ひに貫通せざるが爲めのみ。

* * * * * * *

有害なる社會主義

又た曰く、

最も有害なる社會主義は、ロイド・ジョージ執政時代から、國民の社會組織の內臟に浸潤し、國民の多數を擧げて、國家に向て、我に食せしめよ、我に衣せしめよ、凡有る方便もて、我が幸福の爲めに、世話を燒けと翹

望するに至らしめた。而して所謂る獨立、自恃の英國精神なるものは、今や殆んど消磨し去らんとしつゝある。

臨床講義の價値はあり

と云うてゐる。此れは固より楯の半面である。英國側には之を反駁するの文句が無いでも無からう。されど吾人は如何にも、不景氣患者たる、英國現時の臨床講義として、此の言を聞くの價値なきものとは信じない。

* * * * * * *

英米位地顚倒の斷案

バーカー（J. Ellis Barker）氏は、其の近著「米國の秘訣、其の經濟的成功の原因」に於て、英米兩國の經濟的優越者たる位地の顚倒に就て、其の斷案を下して曰く、

大英帝國は、北米合衆國よりも、其の幅員に於て五倍廣く、其の人口に於て、亦た五倍多し。而して尙ほ今日に於て、昔は偉くて今や落ちぶれつゝある親類視せらるゝ、悲境に沈淪したるは何ぞや。是れ偏へに社會

主義の毒害によつて然るのみ。英國の富と英國の威力とは、個人主義によりて盛り立つた。個人主義は大帝國を建造して、且つ之を經營した。若し英國が米國流儀に、其の方策を改めずんば、英國及び大英帝國は擧げて、米國の附庸とならむ。

既に遠き過去の歴史

と。此れは固より英人を警省する爲めの言として、多少割引の必要あるは云ふ迄もない。されど英國は自から工業國であり、製造國であり、米國は農業國であり、原料國であつたが。斯る兩國の分業は、既に遠き過去の歴史に葬り去つた。

（昭和四年八月十三日稿）

第二十九　弗の米國

黄金崇拜主義の脅威

羅馬人が世界に打ち克ちたるも、羅馬人の努力である。米國人が世界に打ち克たんとするも、米國人の努力である。如何に割引しても米國の偉大は、米人の力作を、其の根本原因とせねばならぬ。然も其の脅威に就ては、西歐も、東亞も、同樣に之を感じ、且つ感ず可き理由がある。何となれば米國は、二重に世界を脅威しつゝあれば。其一は物質的なる富の力である。其二は精神的なる黄金崇拜主義である。而して我が日本に於ては、寧ろ後者を以て甚しとせねばならぬ。何となれば假令米國なきも、我國に於ては、自發的に所謂る拜金宗は弘通せられつゝある。況んや米國の黄金十字架なる、崇拜の對象物を、半天に赫灼たらしめて、其の崇拜熱を煽揚するに於

てをや。

* * * * *

一切萬事弗もて支配

所謂る信仰自由の爲めに、萬難を排して、大西洋の風浪を凌ぎ。寂寞、荒寥にして、且つ土著インデアンの危險さへある土地に、新たなる自由の天地を開拓せんと試みたる、北米合衆國の始祖、當時の巡禮祖先（ピルグリム、ファーザース）の事歴などは、今日の米人は記憶しつゝある乎、否乎。そは吾人の深く問ふ所ではない。但だ如何に彼等が弗を追求し、弗に熱中し、弗を愛好し、弗を尊崇し、一切萬事を弗もて支配し、弗にて判決し去らんとするかは、寧ろ現代的一大奇觀と云ふの外あるまい。

* * * * *

『今日の亞米利加』

英國の老記者スペンダー氏は、其の近著「今日の亞米利加」に於て、左の如く語りてゐる。

殆んど何處でも、弗が受け容れられたる標準である。而して總ての新聞は皆な何物に就ても、其の代價附を報道する。

* * * * *

曰く一千萬弗の大學、曰く五百萬弗の繪畫館、一百萬弗の教會堂。日毎に弗が世界に於ける、全捷の凱歌を擧げざるは無しだ。

* * * * *

米國には幾百の文學界、考古學界、科學界に於ける超卓せる人物がある。然も彼等が其の著作もて、巨大なる金贏けをせざる限りは、彼等の盛名は少數なる玄人筋の外は聞えない。

* * * * *

米國の大金持は大學や、高等學校に、甚だ寛大なる寄附をする。されど彼等はそれが世間の耳目を聳動せしむる樣にする。而して其爲めに、校

堂は如何にも巍然たるが、其の教師は薄給にして、世間に名も出されない情態にしてあるものが多い。

* * *

或る米國の教授慨然として、予に語りて曰く、米國は過大に寄附せられたる大學と、過小に報酬せられたる教授の土地であると。

* * *

陽德陽報でこそ滿足

基督の所謂る右の手に施したるを、左の手に知らしむる勿れとの金誠は、今や黃金十字架の下に跪く連中には、決して其の意義をなさない。彼等の寄附は、一種の廣告であり、又た彼等の虛榮心の滿足であれば、教授などは固より彼等の眼中に入る可き筈がない。彼等には所謂る陰德陽報などの廻り遠い事は無用である。彼等は陽德陽報でなくては滿足が出來ない。

* * *

大體に就て弗の大繁昌期

固より除外例は、何處にもある。米國とても其の富豪の中には、陰德者もあらう。又た未だ全く弗の爲めに魅惑しきれない者もあらう。されど其の大體に就て見れば、實に弗の大繁昌期にして、彼等は禁酒の代りに、弗に陶醉してゐる。政治も弗の政治、海軍も弗の海軍、外交も弗の外交、新聞も弗の新聞、宗教も弗の宗教。凡そあるとあらゆるもの、一として弗ならざるはなし。而して其の餘勢をもて、之を周邊に發揮し、弘通し、膨脹せしむ。其の周邊者の當惑知る可きではない乎。

* * *

軍資供給貸借の處分

米國は英國を首として、歐洲の協商國側に多大の軍資を供給し、今やそれを尋常一般商業的貸借の規法に準じて、之を取り立て、且つ取り立んとしつゝある。列國は此の債權は（第一）米國も其の仲間の一人たる協同戰爭の爲めに生じたるもの。（第二）然も列國は米國の金を借りて、直ちに之を米

國より購求したる軍需品に支拂うたるものにして、米國は此れが爲めに、不當とは云はぬが、過大の奇利を占めてゐる。されば之を普通一般の商取引と同一視し、同一取扱をするは、寧ろ不人情ではあるまい乎と訴へたれども。米國では人情は人情、貸借は貸借、之を混同す可きものではないとて、當然の債權として、飽迄歐洲列國より之を搾取せんとするの意氣込を示してゐる。是れが米人氣質である。

（昭和四年八月十四日稿）

第三十　米國の政治的腐敗

政治其物が腐敗と異名同質

吾人は寧ろ我が日本の現狀に比して、米國の政治的腐敗の過甚ならざるを不思議とする。何となれば此の如く大びらに黃金萬能力を振り翳すに於ては、如何なる醜惡なる事をも、政治上に行ひ、且つ行ひ得らる可きは、寧ろ當然の事であるからだ。然もそは唯だ日本の現狀に比較してのこと、米國としては決して政治的醜聞には缺乏しない。但だ殆んど之を不思議とする者が無いのみだ。云はゞ米國人は、政治は其の本質的に腐敗し易きもの、否な政治其物が腐敗と異名同質であると觀念してゐるかの如く思はるゝ。

政治的腐敗の定義

* * *

ドレーキ氏は、其の著「新道義」に於て、政治的腐敗の定義を下して曰く、

政治上に於ける腐敗とは、公共の利益の爲めよりも、私人の利益の爲めに働くことを云ふ。

と。如何にも其通りだ。而して其の私人とは、時に一個人、時に數個人、時に小團體、時に大團體、但だ國家以外の爲めに謀るものを云ふ。此の意味に於て、黨利黨益の爲めに、國政を濫用するが如き、固より政治的腐敗である、否な其の骨頂と云はねばならぬ。

＊　＊　＊

政治的腐敗の斷案

ドレーキ氏は、所謂る政治の腐敗に就て、左の如き斷案を下してゐる。

官吏には俸給がある。然も彼等は其の以外の收入を、公共から、不正手段もて捲き揚ぐる。

＊　＊　＊

公共から捲き上ぐる手段には、拔目がない。時としては不用の官職をも設置する、現在せぬ官吏の俸給をも掠め取る。あらゆる想像的費目を作爲して、その支拂を徵求する。

＊　＊　＊

議案の通過も、金づくだ。議案の否決も、金づくだ。如何なる公共に利益なる立法でも、彼等の利益と衝突すれば、決して通過の氣遣がない。

＊　＊　＊

腐敗せる政治家は、自から腐敗してゐるとは氣付いてゐない。彼等はそれを當然の利得と心得てゐる。而して凡有る會社は、利巧なる辯護士や、代理人を雇ひ入れ、彼等の利益が、公利公益であるかの如く、世の中に見せつける工夫に拔目がない。

＊　＊　＊

國家の要務に任ずる者は、概して何等の素養なき、平凡なる腕前にして。

彼等は唯だ黨派に忠實である者と云ふばかりに、それぞれの重要なる役目に擢んでられてゐる。

* * *

正しく米國の現狀

是れは正しく米國の現狀を描き出したるものと云はねばならぬ。而して彼は更らに一轉語を下して曰く、

要するに我國（米國）資本的事業者の見解によれば、事業とは唯だ金を作ることだ。政治は政治家の事業であると。

* * *

利用買收の不文律

卽ち政治家が政治によりて、金を作るは當り前だ。而して彼等を利用して、彼等を買收して金を作るも、亦た當り前だとの不文律が、米國の政界、及び事業界に行はれつゝあるを、ドレーキ氏は慨嘆してゐる。而して彼は更らにワイル氏の言を引用して曰く、

今日の政治的腐敗の危險は、たゞに不道德にして、否民主的であるばかりでない。それが屢々乎として節制あり、壓倒的なる金權政治に闖入するの徵候を示すものであるからだ。

利益の爲めに一切を支配

と。而して彼は更らにヘンリー・ヴアン・ダイクの語を援き來りて曰く、

今日の金持共は、表て立て支配階級とはならない。彼等は世の中の嫉妬や猜疑を慮りて、自から遠慮する。されど金持共は、其の地方的と、國家的とに論なく、彼等の利益の爲めに、將た其の勢力を確保し、而して隱密に於て、支配階級たらんが爲めに、一切の立法を支配せんと勗めてゐることは、推定以上の確實だ。それは自然だ、それは確實だ。

と。然も彼は更らに、米國の輿論の、此の傾向に對して無頓著なるを憤慨して曰く、

困つたことには、輿論が是等の腐敗を、殆んど當り前の事として受け容

れつゝあることだ。

＊　＊　＊

輿論の無頓著の一例

ワシントンの大統領であつた時、有名なる檢事總長を、今日では殆んど問題にもならぬ程の小過の爲めに罷免した。然も憤怒と侮蔑とを以て。而して當時の國民も亦た之に共鳴した。大統領グラントが、其の內閣員の或る不正事件を援護せんとしたるや、公憤の激波の爲めに一掃せられた。然るに近來大統領ハーデング在職の際に、其の內閣員の三名までも、何れも行政的醜怪事件を惹起し、其の醜怪や、未曾有の程度であつたが、當人は平氣で其の威信を保ち、彼を選出したる共和黨は、之が爲めに何等の影響をも蒙らなかつた。

＊　＊　＊

新聞の腐敗

米國事業界の大先達や、大都府の大新聞や、何れも斯る問題を秘密に葬らんとし、苟も侃々諤々の正論讜議もて、此の醜怪の事實を指摘するものあれば、却て其人に惡名を負せ、其の注意を他に轉ぜしめんとしてゐるもの、滔々皆な是なりだ。

＊　＊　＊

腐敗に狎る

而して我等は凡有る政治的腐敗に、今や狎れきつてゐる。例せば如何なる不正手段にて、元老院議員が選擧せられたりとて、如何なる惡黨、破落戸が、大都府の市長に選擧せられたればとて、我等は新聞にて之を一讀し、一寸肩を搖かすばかりにて。直ちに他の運動記事に眼を轉じ去る。吾人は以上によりて、略ぼ米國の政治的腐敗の梗概を領取することが出來ること信ずる。

（昭和四年八月十四日稿）

第三十一　國是と理想

帝國現狀憂慮の三點

若し我が大日本帝國の現狀に就て、最も憂慮に勝へないものを擧ぐれば、(第一)國是の一定せざる事。(第二)理想を失墜したる事。(第三)國民を擧げて黃金に中毒しつゝある事である。人或は日本は總ての事に行き詰つてゐると云ふ。果して然る乎、否乎。假令然りとするも、吾人は決して心配はしない。何となれば窮すれば則ち通じ、極まれば必らず變ず。行き詰まるは、更らに局面を一變す可き機會の到來したるもの。若しそれ行き詰まりたるまゝ、做す所なくんば、行き斃れとなるの外なけむ。されど若しその機會を看取せば、再生復活の道、決して難しとはしない。但だ憂ふ可きは、今日の如く國民を擧げて、醉生夢死の情態である。

國是なく理想なく唯だ物慾に陶醉

* * *

國是とは何ぞ、國民の當面に遂行せんとする一大方針である。理想とは何ぞ、國家の到著せんとする標的である。而して我が日本は此の二者を持たない。而して此に代るものは唯だ黃金に中毒して、物慾に陶醉しつゝあるのみだ。吾人は之を我が兩隣たる露西亞に比し、北米合衆國に比し、否な之を中華民國に比してさへも、中心寔に忸怩たるものがある。

* * *

米國の米國第一主義國是

吾人は決して米國の黃金萬能主義に隨喜するものではない。されど彼等は米國第一主義を、其の國是とし、而して恐らくは其の理想として、全國民を擧げ、鋭進し、猛進しつゝある。吾人は彼等が傍若無人の振舞には、面憎くあるが、其の勇ましき、男らしき、凛々たる態度には、覺えず脫帽を禁ずる能はざるものがある。

＊　＊　＊　＊

主義に生くる露國の赤化主義

露國の赤化主義に至りては、吾人は猛獸毒蛇の如くに、之を四境の外に驅逐せんとしつゝあるもの。其の本家本元に對して、何等嘆美、欽崇す可き理由は無い。されど彼等が露國百敗の餘を受け、世界の凡有る强大國を敵としての武者振は、如何にも立派ではない乎。彼等は決して徒らに生存するものではない。主義の爲めに生存し、主義の爲めに努力し、主義の爲めに奮鬪し、而して主義の爲めに、世界に對して一大挑戰を試みつゝあるではない乎。

＊　＊　＊　＊

中華民國の三民主義

更らに中華民國に就て見よ。彼等が空言不實行の國民であるは、今猶ほ古の如し。彼等が言行不一致は、今猶ほ古の如し。吾人は彼等の看板を見て、直ちに其の內容を信ぜんとするものではない。吾人は彼等と正札付にて、取引せんとするものではない。されど彼等の三民主義は、妄想にせよ、眞想にせよ、彼等は之を高標して、國家の力を、此に統一せんと努力しつゝあるではない乎。吾人は口前ほどに彼等の言分を受け納れんとするものではない。されど最近に於ける彼等の行動は、少くとも頽廢の死灰中より、新たなる一點の火光を認めざるを得ざるものがある。

＊　＊　＊　＊

何れの國民にも國是あり理想ある

吾人は決して隣國を讃美して、自國を非難せんとするものではない。但だ自から顧みて、我國の現狀を見れば、實に何とも云ふに云はれぬ心細さを感ずる。實に何とも名狀し難き情けなさを感ずる。吾人は決して常習的悲觀者ではない。されど何れの國民にも、皆な或る國是があり、或る理想がある。特に獨逸國民の如きは、振古未曾有の大敗戰を經、凡有る屈辱と、凡有る壓迫と、凡有る復讐を經、凡有る苦杯を滿喫して。慨然新奇蒔き直

獨逸復興力の一大驚異

しにかゝり、今や大戰後十年を過ぎて、却て世界に於ける一大驚異の對象となりつゝあるではない乎。其の空前の大飛航船ツエペリン伯號を製作し、世界一週の快擧を企てたるが如きは、決して好事のためではない。寔に世界に向て、獨逸國民尚ほ健在であることを、證明せんとするの雄志に外ならない。

* * *

國運退却の日本

世界大戰後、吾人をして公平に云はしむれば、其の國運が停滯しつゝあるは、英國であり、退却しつゝあるは日本である。自餘の諸國は、互ひに乘除する所はあるも、尚ほそれぞれ其の新たなる面目を發揮し、若しくは發揮せんとしつゝある。而して停滯しつゝある英國さへも、マクドナルドの新內閣は、尚ほ吾人に一縷の望を繋がしむるものがある。然も我が日本に於ては、其の田中內閣と、濱口內閣と、將た何人の內閣とを問はず。此の如く

黨是ありて國是なく。現狀安著ありて、憧憬的努力なく。徒らに國政を私利の競爭市場とし、國家を個人の喰物にして、自から戒飭するを知らざるに於ては、知らず何の所にか、其の希望を措く可き乎。

（昭和四年八月十四日稿）

國是なき國家は、柁楫なき船の如く。

理想なき國家は、海圖なき航海の如し。